
Cross world 2nd season ～海底都市と機械猫～

百花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross world 2nd season ～海底都市と機械猫～

【Nコード】

N1981P

【作者名】

百花

【あらすじ】

いつもの日常。いつもの毎日。世界を同じくして暮らす2つの日常が、ある日突然混じり合う。海の中に造られた街で。

クロスオーバーなSFアドベンチャーここに開幕。

File 0 平穏な日常

【こんにちは。お昼のニュースです】

居間から見渡せる台所で、日向夏美は鼻歌混じりかつ軽快に食器を洗っていく。

【ブレアジムカンパニーが海底都市『スイアクル』を完成。式典は今月の28日に行われる予定です】

「いいなあ」

いつの間にか現れた冬樹がため息をつく。

「行ってみたいよ。海底都市」

オカルトでは無い物に興味を示すのは珍しいな。

そんな事を夏美は考えていた。

だが2人はまだ気付いていなかった。

このニュースがとんでもない事件の幕開けになるなんて。

To be continued

File 1 Easy mission

【こちらギロロ。全員、応答しろ】

低くかすれた男の声がクリアに耳に通る。

【こちら、タママ。聞こえてるですかあ】

【こちらドロロ。聞こえてるでござるよ】

甲高い少年の言葉に続いたのは柔らかな青年の声だった。

それを聞いた少女はヘッドセットのマイク位置を調節し、口を開いた。

「弥々華だよ。誰か応答して？」

【こちらギロロ。聞こえている。無線では『こちら』を付けんか】
「了解」

少女、茨田弥々華は若干口を曲げ、返事を返した。

【感度は良好のようだな】

男、ギロロの声に覇気が宿る。

【いいか、白兵戦陣形で目標を封じる。前回の演習を忘れるな】

【陣形は？】

質問は青年、ドロロからだった。

【決まっとる】

ギロロが軽く息を吸い込んだのが、無線越しにもはつきりと分かった。

【正面突撃だッー！】

【「了解！ー」】

元気に返答を返したのは、弥々華と少年、タママ。

【やっぱりね……】

僅かな呆れと懐かしさが入り混じる声はドロロだった。
眼前を塞ぐドアが開く。

「茨田弥々華！！ 出ますー！！」

弥々華は気合いを込めてそう言い放つと、眼前に広がる市街地に身

を踊らせた。

ここぞとばかりに撃ち込まれたミサイルが爆発する。

どこにでもあるような現代的な街並みの上では、近未来的な空中戦が繰り広げられていた。

飛行ユニットが背中に翼を展開させ飛ぶのはギロ口。両手に握るのはロケットランチャーとミサイルポッド。

全弾を吐き出し、地球製の戦闘機に鋼鉄の死を撒き散らす。弾切れとなったそれを放り投げ2丁のビームライフルを握る。違う事無く光線が着弾。

爆発と火薬臭が、戦闘機の破壊を教えていた。

「なあッ!!」

それにより一瞬、気を抜いたのがまずかったのだろう。

エネルギーの収束音に、ギロ口の顔が驚きで歪む。巨大な空中戦艦が、極太の光線を吐き出そうとしていた。

収束音が、瞬間的に止まる。

それが格好の隙となった。

黒い影がギロ口と戦艦の前に割って入る。

「タママインパクト!!」

タママと戦艦が光線を吐き出したのは、ほぼ同時だった。

金色と薄青の光線が競り合う。

押したのは薄青の光線だった。

だが、競り負ける。

金色の光線は薄青の光線を押し戻し、戦艦まで辿り着く。爆発したのは次の瞬間だった。

「やったですう!!」

あどけない横顔に、先ほどの面影は皆無だった。

ダン！！

「タマツ！？」

タママの1人乗り円盤、フライングソーサーが不意に揺れた。振り向いた時には赤黒い影が、空を舞っていた。

「黒白風華、発動！！」

空を飛ぶ弥々華は、空中から日本刀を抜き放つ。

「風華招来！！」

全身を使った振りで放たれた衝撃波が、戦闘機を両断する。更に回転して放たれた一撃が戦闘機を轟沈させた。

「よし」

当たり前と言わんばかりに弥々華は笑った。

落ちていく戦闘機を眺める男がいた。

ドロロは軽快に屋根を伝う。

斬！！

戦闘機を微塵に切り刻みながらドロロは更に破片を伝い、中空に舞う。

「アサシンマジック」

振り上げた手に現れたのは、光の巨大な手裏剣。

「流星十字手裏剣！！」

放たれた一撃は、戦闘機を破壊していく。

彼らの力は圧倒的だった。

このまま地球はなすすべ無く宇宙人に乗っ取られるのだろうか。その刹那だった。

「あ……？」

そんな間拔けな声を出したのは弥々華だった。

街が、戦闘機が、一瞬揺らめき、消えていく。

【時間一杯、ゲームオーバーだぜえ】

白いドーム状と化した部屋、シミュレーションルームに響く陰湿な声。

【続きやりたきや100円入れな。くーつくつくく……】

「貴様、これは訓練なんだぞ！！ ふざけるなあッ！！」

どこか楽しい男、クルルに突っ込みを入れるギロロ。

いつもの光景に、弥々華は微苦笑を浮かべた。

次の瞬間だった。

機械的な和音が鳴り響く。

タママが僅かに身じろぎした。

弥々華はポケットから携帯電話を取り出す。

「ごめんなさい。仕事のメールだ」

弥々華は小さく頭を下げた。

「おひさしぶりでありますな。ジム殿……と」

普段喋るスピードで緑の男はキーボードを打ち込み、エンターキーを押す。

送信された言葉への返事はすぐに返ってきた。

こっちこそお久しぶりですね。軍曹さん

そう言えば最近出たRG 1/144 MS-06S シャア専用
ザク買いましたか？

ディスプレイの言葉に、男はニンマリと笑う。傍らの箱を撫でながら返事を打ち込んでいく。

「もちろんでありますよ。これジム殿は？」

エンターキーを押し込み、ワクワクしながら返事を待つ。その瞬間だった。

「おい、ケロロ」

ジャキリと言う金属音が耳をうつ。そして後頭部に当たる冷たい感触。

地獄の底から響くようなドスの効いた声に男、ケロロは冷や汗が吹き出すのを感じた。

「貴様、訓練サボって何をやってる」

同じ年とは思えない、低い声にケロロの顔から血の気が引いていく。「いや、これはでありますなあ。いわゆる現地民と対話でもしてみようかと、思いました」

「へえ、チャットしてたんだ。だから会えなかったんだね」

冷静な少女の声に、ケロロの背がまた冷える。

「任務あるから最後に顔くらい見せて帰ろうって思ってたけど来なくても良かったかもね。あとジムって人？ 心配してるみたいだよ」
ディスプレイを眺める弥々華にケロロは全身が震えるのを感じた。
そのディスプレイには

大丈夫ですか？

と言う文字が並ぶ。

「貴様、訓練をサボってチャットにうつつを抜かしていたのか？」

ギロロの虹彩が灰色に染まる。

「じゃ先、帰るねえ」

弥々華の小さな声が静寂を裂く。

次の瞬間、銃声とケロロの悲鳴が響いた。

世界は変わる。

弥々華はケロロ達が住むパラレルワールドを出て、自分の世界に戻っていた。

自宅兼勤め先であるA p d s c o《能力者派遣・空間管理署》の署長室に弥々華は軽いノックと共に入り込む。

「失礼しまーす。署長。こんにちは」

「ああ。茨田か」

ぶつきらばうな返事を返したのは空間管理兼能力者派遣部署署長、リドアイル キース。弥々華の直属の上司である。

「任務ですか」

キースは軽く顎を引く。

「ああ。だが休暇も兼ねてる」

「え？ 任務に休暇？」

頭の上でクエスチョンマークを浮かべた弥々華にキースは1枚の紙を差し出した。

「『ブレアジムカンパニー主催……海底都市3日間の旅モニター募集』？」

「ああ」

キースは事も無げに頷く。

「ブレアジムカンパニーって会社があるんだが、そことA p d s c oは親しい関係だね。観光客モニターを募集してるんだ」

「モニターって、何するんですか？」

「簡単さ。3日間ツアーに参加して、最終日に良かった点と悪かった点の報告書を提出する。それだけだ」

「へえ。楽しそうですね」

「それでだ」

キースは傍らのコーヒーをゴクリと飲む。

「ケロロ小隊及び関係者の方々には、3ヶ月前の事件で世話になっ

ただろう？ 彼らも一緒に招待してはどうかと思うんだ」

「い……良いんですか？」

「ああ。許可を取れたら連絡しろ。じゃ伝えに行ってくれ」

「はい。ありがとうございます」

弥々華は深く礼をすると、踵を返す。

その時、キースは弥々華の笑顔を確認に見た。

T o b e c o n t i n u e d

File 2 いざ海底都市へ

11月30日。

天気は快晴。

時刻は午後6時を回ったところだった。

「冬樹！！ パスポートは持った？」

スーツケースに頭を突っ込んでいた夏美の声に冬樹が答える。

「持ったよ。着替え、そっちに入ってたよね」

「おい、夏美。東谷小雪が来たよ」

玄関から顔を覗かせたのは弥々華。

「あ、ありがとうございます。中に入ってもらって下さい」
「了解」

軽い敬礼を決め、玄関に走る。

「夏美さん。邪魔しまーす」

「邪魔するでござる」

やってきたのは東谷小雪とドロロ。

「小雪ちゃん。こんばんは」

「おい、迎えが来たぞ」

庭から現れたギロロに冬樹が首を傾げた。

「本当に？ 伍長」

「あ、あたし隊長呼んでくる」

弥々華はバタバタと軍曹ルームに駆け出した。

「軍曹さん！！ 来たですよ」

「隊長！！ 早くしないと迎え来てるよ。ってクルルは？」

タママと弥々華。顔を出したのはほぼ同時。

「ここにいるぜえ」

クルルは小さく笑い、弥々華の頭に乗った。

「あ、ママからメールだわ」

駆け上がる4人。リビングに入って聞こえた第一声はそれだった。

「あ。タママ、西澤さんは？」

問いかける冬樹、タママはさらりと答える。

「モモチなら、本オープンにしか行けないって行ってきましたよ」

「そうだっけ？」

「いやー。遅くなつてすまんであります」

頭を掻いたケロロに苦笑する冬樹。

「全員そろったね。忘れ物はない？」

弥々華がキリリと問い掛ける。全員が頷くのを見たのはモア。

「ってゆーか、出発進行？」

乗り込んだのは黒光りするタクシー。

18時ジャストに日向家を出発。予定通りの出発となった。

「わあ、すごい！ こんな飛行機初めて乗るわ……」

羽田空港、某レーン。

そこに止まる飛行機は小型だがとても美しい流線型を描いていた。

おんぼろ飛行機とは違う洗練された形に、夏美は感嘆の言葉を漏らした。

「すごいですね。夏美さん」

身軽にすり寄る東谷小雪に飛行機は見えていないだろう。小雪に苛立ちを募らせるギロロの目にも。

壁面に刻まれた『Blairgym company《プレミアム社》』の文字が誇らしげに輝くのを、弥々華と冬樹はぼんやりと見つめた。

「西澤さんも来られれば良かったのに……」

「そうですね。まあ、オープンの日に行くみたいですから」

何気なく、2人が呟いたときだった。

「ああ、皆様。いらつしゃいましたか!!」

不意に大きな声が辺りに響いた。

声の主は飛行機のタラップを駆け下りて来たのは若い知的な印象が強い青年だった。

「失礼致します。マツダ様、ヒナタ様、アズマヤ様ですね」

僅かな英語訛りを持ちつつも流暢な日本語を喋る男は口角を上げると茶目つ気のある笑みを浮かべた。

柔らかな金髪が風に揺れる。青い目が魅力ある男だった。

「私は、ネイト ソルナ。皆様のツアーエスコート……添乗員を勤めさせて頂きます」

ソルナは端正な笑みのまま全員に握手を求めた。

応じ終わるとソルナは飛行機に手を伸ばす。

「それでは皆様。どうぞこちらへ。ご案内させて頂きます」

「ゲロオ……すっげえ……」

ケロロの声が機内に響く。

「確かに……これは凄い」

弥々華もぼんやりと呻いた。

「我々が誇ります、最高のプライベートジェットです。ごゆっくりおくつろぎ下さい」

ソルナの声はもっともだった。

クリーム色を基調とする機内にはゆったりとした整然と座席が前を向いて並んでいる。それが片側2列、左右あわせて4列が、縦に5つ並んでいると言うところか。

照明は落ち着いた色で、高級感ある雰囲気漂わせていた。

足元のカーペットも毛足こそ短いが、柔らかさが靴越しにも伝わっ

てくる。

「皆様は右側をお使い下さい」

一行はどこか悠々とした気分で通路を歩いた。

一番前の座席に小雪と夏美が座った。

その後ろに冬樹とモアが座る。

弥々華は少し悩んで、モアの後ろ窓際に座った。

ケロロは冬樹の膝の上に座る。

離陸するまでの苦肉の策だ。離陸すれば席を移るものもないので小隊の面々はその後動けば問題ない。

ちなみにタママはモアの膝上。今にもおかしい何かが出そうなのは気のせいでは無い様子。

小雪の膝にドロロ。夏美の膝にギロロが座った。ギロロの顔が真っ赤になったのは言うまでもないだろう。

クルルは弥々華の隣に席を取った。

全員がそこでやっと落ち着いた。

体が埋まるような心地よさに全員が息を呑む。

「マツダ様、ヒナタ様、アズマ様。ようこそ、ブレアジムカンパニー海底都市プレオープンツアーへ」

横に立つソルナは、慇懃に腰を折る。

「出発までもうしばらくお時間がございます。ごゆるりとお待ち下さい」

「ソルナさん。離陸は22時のはずでは？ 遅れるんですか」

弥々華の問いに、ソルナが頭を掻く。時計の針は22時を回る寸前だ。

「はい。もう1組お客様がいらっしゃるのですが、到着が遅れておりまして……」

「そうですか」

「はい……」

ソルナがそう言って、申し訳ない表情をした。その時だった。

「Mr, Soruna The guest came. 《ソルナさん。お客様がいらつしゃいました》」

柔らかな通信がソルナを呼んだ。

「では失礼します。皆様に良い旅路が訪れん事を」

颯爽とソルナは去る。

それを夏美は何気ない視線で見送った。

「格好良い人ね。ソルナさんって」

「そうか？」

硬い声を出すギロロに苦笑するドロロ。

「人間は中身でござるよ。ギロロ殿」

ドロロはそう言って、小さく笑う。

「そうですよ。夏美さん」

そう言って小雪も笑った。

「ああ、皆様。いらつしゃいましたか！！」

ネイトは顔に笑顔を貼り付けた。慣れた仕草でタラップを駆け降りる。

「失礼致します。ゴー様、スズキ様ですね。私、ブレアジム社社員、ネイト ソルナと申します。皆様のツアーエスコート……添乗員を勤めさせて頂きます。以降お見知りおきを」

慇懃とも言える仰々しい礼。

顔を上げると、そこには3人の男がいた。

1人は眼鏡の男だ。立ち姿から真面目さが伝わってくる。

もう1人は小柄な男。研究者なのか白衣を着ていた。禿げかけた頭髪が頼りなさを感じさせる。

最後の少年は全身を覆う黒猫の着ぐるみを身につけていた。変わっ

た物だとネイトは思う。

「それでは荷物をお預かりいたしますね」

少年がもたれていたスニーカーにネイトは手を伸ばした。時だった。

「これはボクたちがもって歩きますから、大丈夫です」

着ぐるみの少年はにつこりと笑う。

「はあ」

ネイトはスニーカーから引いた。

「では、こちらへどうぞ」

変わった扮装の一行は飛行機に足を踏み入れた。

「なんだろ。あの人たち」

弥々華は小さく呟いた。

通路を横切った一団は、自分に負けず劣らず変わった『匂い』がする。なんとなくだが、弥々華はそう感じた。

第六感というような根拠の無い感覚だった。

服装も白衣に着ぐるみと変わってはいたが、それだけでは無い。強い違和感。

『普通』ではない違和感。

その上、自分の隣にいたクルルを凝視した気がするのは気のせいだろうか。

「普通の人間じゃ無さそうだなあ」

クルルが低く呟く。

指先はノートパソコンの上を滑るように動いている。

「なんだかこの旅……一混乱ありそうだね」

窓の外に目をやり、小さく苦笑する。自分はトラブルに遭いやすい

気がする。

そんな事を考えながら。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

File 3 突然ファーストコンタクト

時計の針が23時を回る。救命具やサービスなどの説明が終わって10分弱。機内は、落ち着いた雰囲気には満ちていた。

夏美と小雪は談笑に勤しみ、モアはケロロ小隊の面々と共に後ろの座席へ回り、お喋りを楽しんでいた。

ただクルルだけは弥々華の隣でノートパソコンをいじっていたが。そんな中退屈の極みにいた弥々華は、立ち上がり前の背もたれに腕を掛けた。

「なに読んでるの？」

「え？ えーと、これから行くところの近くにある遺跡の本です」
冬樹は表紙を弥々華にためらいなく見せた。

「『海底の墓標』……。墓標ってお墓の目印の事だよ」

「海底都市の近くにある遺跡で宇宙人のお墓説があるんですよ」

「宇宙人！？」

弥々華が素っ頓狂な声を上げる。

「はい。数百年前、海底都市の場所の近くは陸地だったんですよ。宇宙人をお墓に埋めたら水かさが上がって遺跡が沈んだって説があるんです」

「へえ」

「でも、いろんな説があるんですよ。当時の王族のお墓説とか。それを調べられればいいなあって思いますよ」

にこりと笑う冬樹に、弥々華も笑いかけた。

「うん。幸運を祈る。何か分かったら」

弥々華の言葉はそこで途切れた。

ぐらりと視界が揺らぐ。

「ッ！！ 痛ったあ……」

足元がふらつき、頭を壁に打ちつけた。

「大丈夫ですか？」

「平気、平気。それよりひどい揺れだね」

弥々華は微苦笑で冬樹に応じた。

飛行機は今までに無い揺れを見せていた。まるで地震でも起きたようだ。

夏美やケロ口とモアも悲鳴を上げている。

反対側も例外では無かった。

【当機は乱気流に突入しました。皆さん、シートベルトを着け座ってお待ちください】

慌てたようなソルナの声がスピーカー越しに響いた。

そんな時だった。

「ああ！ まずい！！」

反対側の白衣の男が悲鳴を上げた。

「大変だっ」

猫の着ぐるみの少年も引きつった声を出す。

彼らの前にあったスニーカーが転がりだしたのだ。

左右上下。揺れる飛行機にあわせて、スニーカーはふらふらと動く。

男と少年は慌てた表情でスニーカーを見守った。

飛行機が上昇する。

スニーカーは加速を付けて、後方へ転がる。

そして。

鈍い鈍い、音がした。

スニーカーは壁にぶつかり、やっと倒れた。

揺れが収まる。

数秒、沈黙が走る。

次の瞬間だった。

ガン！

そんな音があった。

スーツケースが、内側から、開いた。

「痛つてえ……なんなんだよ」

「ああー。びつくりしたなあ」

「クロちゃん。怖かったよお」

「テメーはくつつくな」

「全く……」

口々に話し出す『中身』を、ケロロ達は呆然と見つめた。

「……なんだ。アイツら」

黒猫が、不意にケロロを凝視する。

「分かんない。『サイボーグ』かなあ」

青と黒を基調にしたメタリックな猫が首を傾げた。

「アタイは生きてるものだと思うけど……」

大きな耳を持つ小さな何かが黒猫にくつついた。

「分かんが……とにかく蛙か？」

眼帯を付けた虎猫の言葉をケロロは聞き逃さなかった。

「失敬な!!」

ケロロは勢いよく立ち上がる。

「我輩は『ガマ星雲第58番惑星 宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊

隊長 ケロロ軍曹』であります!! 地球^{ペコボン}の蛙と一緒にしないで欲し

いであります」

「喋るんだ……」

青い機械猫が小さく呟く。

「つーかなんだよ……ケロン星だのペコポンの。まさか地球侵略

に來た宇宙人じゃねえだろうなあ」

黒猫が呆れかえった口調で呻く。

「貴様、自分から正体を明かしてどうする!？」

ギロロは条件反射でケロロの襟首を掴むと力一杯揺すった。

ケロロの悲鳴に黒猫が呆れかえった表情を向ける。

「いや、テメーも自分からバラしてんじゃねえか」

「で、アンタたちは何者な訳？」

3匹の猫が、首を回す。

視線の先には弥々華と冬樹、小雪と夏美にモアがいた。

「もしかして、君たち化け猫？」

冬樹は好奇心を丸出しにして黒猫に話しかけた。

「オイラは化け猫じゃねーよ」

「じゃあなんなの？」

弥々華の言葉に黒猫は不敵な笑みを浮かべた。

「そういうときはそちから名乗るもんじゃねえか？」

弥々華は視線を明後日の方向に向けた。ため息を1つ落とす。

「ハイハイ、分かりました……。A p d s c o空間管理兼能力者派遣部署・A - 113小隊兼ガマ星雲第58番惑星 宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊ケロロ小隊所属、茨田弥々華曹長。以後、よろしく」

「長いな」

「そしてよく噛まずに言えたなあ」

「そこ、どうでも良いことツッコむな」

弥々華は軽く虎猫と黒猫を指差した。

「僕は日向冬樹です」

「私は日向夏美」

「ギロロ伍長だ」

「タママ二等兵ですう」

「アングル」モアです。てゆうーか自己紹介？」

「ドロロ兵長でござ」

「クルル曹長だぜえ」

「東谷小雪です」

全員が口々に名乗ったのを見た黒猫が観念したようなため息を吐いた。

「オイラはクロだ」

黒猫がためらいなく名乗る。

「ボクはミー。サイボーグだよ。よろしくね」

機械猫が自分を指差した。表情の無いメカニックな顔だが、どこか

笑っているように見えた。

「アタイはナナ。クロちゃんの彼女でーす」

小さなナナはクロに抱きつく。

「誰が彼女だ」

クロは躊躇無くナナをはねのけた。

「拙者はマタビだ」

それを横目で見ていた虎猫がさらりと名乗った。

「じゃあさ」

弥々華の口調が少しだけ柔らかくなる。

「あの人たちはなんなのさ？」

弥々華が背後を指さすと、3人の男が立ち上がる。

「ボクはコタロー。天才少年科学者だよ」

着ぐるみの少年が元気に名乗る。

「コタローちゃんはアタイを作ってくれたの」

ナナが楽しげに笑う。

「ワシは剛。天才科学者じゃ」

白衣の男が軽く名乗った。

「僕やクロを作った人なんだ」

ミーが嬉しそうな言葉を乗せた。

「僕は鈴木一郎です。生徒からはジムと呼ばれてます」

眼鏡の男が、腰を折る。

「生徒って……教師かなんかなの？ あとジムって変わったあだ名だね」

「小学校の先生をしてるんです。あとジムっていうのは」

「ガンダムに登場する連邦の量産型モビルスーツの名前でありましよう？」

ケロロの目はキラキラと輝き出す。

「我輩、ガンプラで作り込んだ事があるのでありますよ」

鈴木の口が、ぽかんと開く。

「失礼ですが、あなたもしかして『軍曹』さん？」

「もしかして……ジム殿？」

数秒の沈黙が走る。

「うわぁー!!! 本物ですね!!! あなたと1度会ってみたいと思
つてたんです!!!」

「我輩こそでありまーす!!!」

ガンブラ談義が始まった2人を機内の人間はぼんやりと見ていた。

「あれは一体なんだ？」

「さあ？」

ギロクとクロの問いに、弥々華は力無く答えた。

「で、クロちゃん？ だっけ」

「なんだよ」

クロは若干不機嫌な声で応じる。

「君は化け猫なの？」

笑顔の冬樹に、クロはなんとも言えない感情になった。

「オイラはサイボーグだ」

とても広い部屋だった。

たくさんの機械やコードが並ぶ、清潔な真っ白い壁の部屋だった。

男はその部屋の中で1つの機械に触れた。それはこの部屋の中でも
っとも大きな機械だった。鉄色の巨大な箱のような機械にキーボ
ードなどのコンソールがくつついた機械だ。

男の手が、コンソールを滑る。

巨大な箱が下がり始めた。

そして、姿を表したのは筒型の水槽だった。

2本の水槽は高さが1メートルほどある大掛かりなものだった。

男は愛おしげに水槽を撫でた。

否、正しくは2つの水槽の中の2体の『生き物』だった。

その生き物は口から小さな泡を吐き出しながら目を閉じて浮かんでいた。

大きさはどちらも60センチよりも小さく、人間のような手足があった。だが頭は大きく体は小さい。せいぜい二等身と言ったところだろう。

片側の体色は漆黒で、もう片側の体色は深い藍色だった。その時だった。

静寂を切り裂くように電子音が響き渡る。

男は近くにあった受話器を耳に当てた。

【天童博士。会議のお時間です】

「分かった。すぐに行こう」

電話を切ると、男はコンソールに指を当てた。

カモフラージュの箱がせり上がる。

水槽はすぐに見えなくなった。

天童勇は振り向かず歩き出す。海底都市の学者が集まる会議へと。

T o b e c o n t i n u e d

File 4 海底都市スィアクル（前書き）

12月11日に投稿した分を差し替えています。
文章に抜けがあったので、そこを加筆し再投稿しました。
ストーリーに変更はありません。

File 4 海底都市スイアクル

夜が明けた。

そう気付いたのは、機内が薄い黄色に満たされていたからだった。

朝焼けの色が、目に染みる。

弥々華は体を伸ばすと、軽い欠伸を漏らした。頭がまだ、眠っている感じがした。

「……トイレ」

弥々華は小さく呟いた。

ちらりと横目を走らせれば、隣には眠ったクルルがいた。まともに寝ている彼を見るのは初めてかも知れないと弥々華は思った。

機内は驚くほど、静かだった。

寄り添って眠る夏美と小雪。軽い、いびきをかくケロロと鈴木。丸まって眠るクロとマタタビ。

起きているのは、数人だった。

起こさないよう、軽く目礼をして弥々華はトイレに入った。

飛行機が着陸したのはそれから数時間後、午前10時すぎの事だった。

クロ達をソルナにバレないよう苦心してスーツケースに詰め込む3人を置いて、まずは夏美が外に飛び出した。

「うわぁ！！ 暑い」

夏美は大きな歓声を上げた。

太陽はじりじりと焦げるような光を放つ。空気はからりと乾き、南国ムードを盛り上げる。

「日本から東へ7500km。暑いと思われても当然でしょう」
ソルナはニコニコと笑いながら返事を返す。

ここは小さな浮き島だった。飛行機の滑走路と大きな建物がある。それ以外はどこを見渡しても海だった。どこか不思議な光景に弥々華の心は踊る。

「それでは皆様、海底都市スイアクルへいよいよ入場します。お忘れ物はありませんか？ そろそろ入場ですよ」

ソルナはそう言葉を繋いだ。弥々華はそこで現実に引き戻された。一行は誘われるまま、建物に足を進めた。中に入ると冷房が体を冷やす。弥々華は思わず安堵の表情を浮かべた。

広いホールを抜け歩いていたのは真っ白い廊下だった。壁や床、天井や照明まで真っ白い廊下に弥々華は目を瞬かせた。要するにまぶしいのだ。

「ここです」

そう言つてソルナは壁のボタンを押した。外見は変哲の無いエレベーターだ。ドアやボタンがそう見える。

ドアが開いた。

やはりそれはエレベーターだった。各人がそれに乗り込む。先頭は夏美と小雪。しんがりはソルナだ。エレベーターは下にゆっくりと動き出した。

「うわぁ……」

数秒後エレベーター内に歓声が溢れた。

全面ガラス張りのエレベーターは海中の様子を一点の曇りも無く写し出したのだ。ケロロやタママ、コタローは窓に顔をくっつけた。

「あ、見てみて、博士！！ 魚だぁ」

大群で泳ぐ魚に歓声が上がる。

周りの色は徐々に深まる。

途中、明かりがついた。

生き物は影を潜め、暗さだけが増していく。辺りは夜に等しい闇と

なつた。外は何も見えない。

ただそれぞれの顔がガラスに映るだけだ。

「なんか……嫌だな」

弥々華が小さく小さく、口の動きだけで呟いた。

「うわぁ！」

「すごいや……」

「素敵ね！」

そこかしこから、感嘆のため息が漏れた。

エレベーターを出るとそこは光溢れる海底都市だった。

出た広場には薄黄色のブロックが敷き詰められている。周りには南国情緒溢れる椰子の木が植わっている。ところどころにあるベンチのデザインすら洒落れている。さらに延びた道はどこまでも真っ直ぐだ。

「ここはスイアクルのちょうど真ん中になります。後ろに見えるのが研究施設です」

ソルナに集まっていた施設が後ろの建物に移る。

それは深い青の建物だった。

円柱形の塔にはところどころ大きな窓が取られており、働く者の姿が見えた。

ソルナは時計回りに足を進める。見えたのは石造りの大きな台形の建物だった。

「こちらは12世紀末のものと思われる、通称『海底の墓標』言う遺跡です。後でどちらにもご案内しますのでそろそろホテルへ向かいましょうか」

ソルナはそう言って全員を誘った。

どうやらこの都市は円形に建物が配置されているようだ。

さらに時計回りに回れば、大小様々な建物が並ぶ場所に出た。

「こちらがホテルですよ」

指差されたホテルは、これまた凝った美しい建物だった。

「わ！ キレイな部屋」

片手に鞆を持ち、部屋にたどり着いた。部屋番号は413。ちなみに自分から名乗り出たものだと思記。

広い部屋に置かれた、これまた大きなベッドに弥々華は腰を下ろす。

「こんな部屋使っていいのかなあ」

弥々華は無意識に首を傾げた。自分とは縁のない贅沢な部屋だ。思わず背筋が伸びる。

「静か……」

少し寂しい。

さつきまであんなにやかましいところにいたのだ。耳に静寂の違和感が走る。

隣にいる冬樹とケロロ小隊の部屋に行こうかと、頭が働いた。

きつと隊長のこと、ばつちりハシャいでいるのだらうと弥々華は苦笑する。

その時だった。

軽いノックの音が3回。心地よく響いた。

「はい？」

弥々華はドアに駆け寄ると、開ける。

「あ……」

そこにあっただのはソルナの姿だった。

「観光のお時間です。お迎えに上がりました」

「あ、どうも」

弥々華は少し面食らった顔でソルナを見上げた。

「15分後にここのロビーにお集まり下さい」

「はい」

ソルナの笑顔に違和感を感じたのは気のせいだろうか？

弥々華は内心首を傾げた。

遺跡の外周を見て回り、研究施設を軽く見学し終えたのは午後12時を回ったあたりだった。

施設内でケロロの気分が悪くなり、ギロロとモア、タママが付き添ってホテルに引き上げた以外は、何のアクシデントもない観光だった。

「ではこれより自由時間になります。ホテルの昼食時間は14時までですので、それまでに食事をお済ませ頂ければ幸いです」
ソルナはそこで頭を下げた。

去り行くソルナを片目で見ながら、口々に話が始まる。

「小雪ちゃん。お昼食へに行きましょう？」

「はい。行きましょう」

「冬樹はどうするの？」

「軍曹のところに行くよ。心配だから」

「あ、あたしも行っている？」

「コタロー君、部屋に寄ってミー君たちと一緒に昼食べようか？」

「はい博士！！」

「あ、待って下さい」

それぞれが目的地へと散っていく。
その時だった。

「あ、すいません!!」

冬樹がぶつかつたのは長身の男だった。やたら前髪の長い初老の男だ。随分目つきの犬を連れている。

男の目が細くなった。

「まずい」

弥々華がすとと2人の間に割って入った。

「すみません!! 急ぐんで、失礼します」

冬樹の手を後ろ手に握ると、弥々華は駆け出した。

「いや、気にする事はない」

男は尊大な口調で呟いた。

「あ、天童博士!!」

かけられた声に男、天童は振り向く。

「なんの用かね？」

声の主は天童を見つめた。

「あの、お部屋から大きな音でサイレンが鳴っているのをお知らせに……」

「なに？」

天童の表情が切迫したものに変わる。

「分かった。すぐに行こう」

「軍曹!! 大丈夫？」

冬樹の部屋に駆け込んだのは冬樹と弥々華だった。当のケロロは静かにベッドに横たわっていた。

「隊長？」

「冬樹殿？ 弥々華殿？」

ケロロは視線を天井から2人に移した。

「大丈夫であります」

へらりと力無く笑ったケロロに冬樹と弥々華は表情を緩めた。

「昨日、朝方までジム殿と喋ってたでありますから、寝不足かもね」

へらへらと言ったケロロは体を起こす。

「もうお昼でありましょう？ お昼ご飯食べてきたらどうでありますか？」

「……ん。そうするよ」

弥々華はこつくりと頷いた。

「行こ？ 冬樹」

「はい」

2人の後ろ姿を見送ったケロロはぐったりと体の力を抜いた。

「おい、隊長？」

「クルル？」

現れたのはクルルだった。

「『あの頃』でも思い出したのかよ？」

「そうでありますよ……」

ケロロの具合が悪くなつたのは生物研究室だった。並んだ水槽や機械類を見て、ケロロは崩れたのだ。

「クルルなら分かるでありますよう」

ケロロの笑みに、クルルは過去を思い出した。

「ああ……無理すんなよ。隊長」

部屋に駆け込んだ天童は、コンソールに手を叩きつけた。鬼気迫る勢いでコンソールを打ち込んでいく。
大音量の電子音は止むことを知らない。

カモフラージュの箱が格納された時、天童は無意識に呼吸を止めた。水槽の中の生物の右腕が、ひくりと動いていた。口元から発せられた泡が、かつてないほど溢れる。

「あ……」

黒い生き物の目が、開いた。口が、動く。

貴様、何者だ？

鮮明に声が響く。

ここは、どこだ？

天童は腰を抜かしたまま、生き物を見つめた。

出せ。

生き物は、唸る。

出せ！！

水槽が、はじけた。ガラス片と水が散乱する。

「ゲホッ……ゲホッゲホッ」

生き物は地面に膝をつき咳き込んだ。酸素を吸い込み、辺りを凝視する。

「……貴様、何者だ。答えろ、『人間』」

生き物は天童を凝視する。

「……………」

天童は呆然とした表情で、生き物を見つめていた。

そのケロン人になにしていたが、手足に小さなヒレとサメの背びれを思わせる角のようなものが頭についていた。漆黒の体色、そして口元

からは鋭い牙が覗き、鋭い眼光を持つ目つきをしている。だがどこか気品のある立ち姿は不思議な感覚を残した。

「まあ、いい。下等種めが。消え失せろ」

「あ……」

天童は無様に立ち上がりよろよろと駆け出した。それを見た生き物はすっと立ち上がる。

「あそこか」

生き物が右手を伸ばした、瞬間だった。

端に置かれた机が、揺れる。

ドンー！！

音を立てて机の引き出しが破られた。

現れた機械が右手に乗った。

一本のアンテナとボタンが沢山付いた球体は姿を変える。

大剣となったそれを握りしめ飛び上がると振り向きざまに一閃した。後ろにあったもう一つの水槽が碎ける。

中に入っていた生き物は、地面に倒れ込む。

先の生き物とは違い、肌の色は深い藍色で頭のツノも牙もない。女のような生き物だった。

「おい、フィール。起きないか!!」

生き物はもう1体を軽く蹴った。フィールと呼ばれた生き物は目を開ける。

「……ザール……閣下？」

フィールは弱々しく呻き、立ち上がる。

「申し訳ありません!! 閣下」

フィールは慌てて立ち上がり跪く。

「ふん……まあいい」

ザールは手に持った機械、メアボールでマントを呼び出す。

「時は来た、さあ始めるとしようか。この暗黒の海底王ザールの新

世界創造をつ!!!」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

File 5 動き出す者

弥々華達の泊まるホテル。そこにあるレストランは海底都市の客人にとつて唯一の食事場所だった。

床は赤いカーペット敷き。ゆったりした椅子に清潔な白いテーブルクロス。宙を見上げればシャンデリア。採光に取られたガラス窓はとても大きい。

古典的だが、贅沢なレストランだ。弥々華は落ち着かなげに辺りを見回す。

少し離れた場所には、夏美と小雪にモア、ドロロ・ギロロ・タママが食事中。飛行機で一緒になった一行の姿もあった。

とにかく、弥々華はメニューに顔を突っ込む。

「よお……」

「弥々華殿ー。一緒に座っていいですか」

「あ、クルルに隊長。もう体はいいの？」

「大丈夫でありますよー」

「そっか。良かった」

小さく笑うケロロと相変わらずの笑みを貼り付けたクルルは弥々華の前に腰掛けた。椅子によじ登ると言った方が正しいかも知れないが。

弥々華は2人の前にメニューを置いた。

「なんか頼めば？ どうせタダだし」

「旅費に含まれてるだけだろ？ チツ、カレーはねえのかよ」

頼杖を付き不機嫌なクルルに弥々華は苦笑した。

「本当に好きだよ、カレー。っていうかどっかに書いてあったよ」

「今、見つけたぜえ」

「それにする？」

「ああ」

頷いたクルルを見て、弥々華は視線をケロロに移す。

「隊長は？」

「これにするであります」

「分かったよ」

弥々華は片手を上げ、店員を呼ぶと注文を済ませた。1人で2人前を頼んだせいか、注文を聞き返される。クルルのニヤニヤ笑いを横目に弥々華は頷いた。

その時だった。

ガラスの割れる大音量が辺りに響き渡ったのは。

「なに？」

弥々華は弾かれたように立ち上がる。

店員は飛び上がり盆を抱えたまま辺りを見回した。

「くつく……アクシデントの始まりってか……」

クルルは陰鬱な笑みでノートパソコンを開く。。

ケロロは目を見開いていたが、すぐに立ち直りギロロ達の方を見る。

彼らは既に戦闘態勢を整えていた。

窓が割れた辺りに目を走らせ、弥々華は目を疑った。

「カニイ！？」

割れた窓から侵入してきたのは蟹だった。

しかも巨大だ。2〜3メートルは確実にあるだろう。赤い目を光らせるその姿は明らかに危険だ。

弥々華は1歩、無意識に引いた。

「クルル！！ アレ！！ なに？」

明らかに動揺しているらしく、弥々華は叫んだ。

「巨大なエネルギーの塊みてえだが……なんだろうなあ？」

「知るか！！」

弥々華が切れ気味に突っ込みを入れた、その瞬間だった。

蟹がこちらに向かって来たのだ。

「カニがまっすぐ走ってる……」

「そんな事言ってる場合がありますか？」

ケロロの言い分は最もだった。

「それもそうだねッ!!」

弥々華は飛び上がる。

「黒白風華発動、風華招来!!」

弥々華が放った衝撃波が、蟹をよろめかせる。だが敵は蟹だけでは無かった。

ギロロはビームライフルを両手に乱射し、タママがタママインパクトを撃つ。半魚人に似た生き物が倒れて行った。

その脇を黒猫が駆け抜ける。その手には空き缶サイズのガトリング砲。

「オラオラオラアッ!!」

半魚人を撃ち続けるそれに、弥々華は舌を巻く。

「やるね、あいつ」

弥々華はバツク転で距離を稼ぐと助走を付けた。

「だあッ!!」

半魚人を斬り倒しながら、弥々華は走り抜けた。

「うわぁ……」

冬樹は小さな嘆息を漏らした。昼食時間、冬樹は食事より好奇心を優先した。目指した先は海底の墓標だ。

中は広い。石造りのそこは空氣がひんやりと冷たかった。

。壁面は美しい原色に彩られていた。海に沈んでいたとは思えない壁画だった。

「凄いや」

触りたくなる右手を抑え、壁画を見上げる。

壁画は人間と、小さな生き物を描いていた。生き物は鯨に似ている二等身だった。

「これって……」

その生き物は剣を振り上げ、人間を威嚇しているように見えた。生き物の周りには1人の従者らしき生き物と巨大な蛸が描かれていた。

冬樹は足を進める。

生き物は人間を積み重ねた上に立った。これは死体なのだろうか。その生き物は、剣には無い何かを捧げ持っていた。

「これ、ケロボール？」

たくさんボタンと1本のアンテナが伸びるそれは、日向家の机の中にあるケロン軍の秘密兵器『ケロボール』に似通っていた。

「ならこれは、軍曹の仲間？」

冬樹は足早に歩を進めた。

生き物は剣と盾を持った人間と戦っていた。

次の壁画では、その人間が2体の生き物を大きな何かに押し込んでいた。

壁画はこれで終わりだった。

「一体、この絵はなんなんだろう？」

片手に持った雑誌には乗っていない情報に冬樹は背が栗立つのを感じた。知的好奇心が膨れ上がり始める。

冬樹は踵を返した。

「あの生き物は軍曹の仲間？ でも……なんだか違うようにも見えるし」

冬樹はまた辺りを見回す。

「でもケロボールは」

冬樹は言葉をそこで止めた。

「まさか……」

冬樹は勢い良く振り返る。

壁画を見直し、息を呑んだ。

鯨のような角。ケロン人に良く似通った体つき。寒色の体色。海の者を彷彿とさせるそれは

「マロン人……」

冬樹は弾かれたように走り出す。

「大変だ。軍曹に伝えなきゃ――！」

だがそれは叶わなかった。

冬樹の体が、後方に吹き飛ぶ。

「いたた……なんなんだよ……」

冬樹は頭と腰をさすりながら顔を上げ、凍りついた。

「う……うわあああ――！」

そこにいたのは3メートル近くあるヒトデだった。

レストランは混乱の極みにあった。

銃声が耳をおかしくし、硝煙で鼻が効かなくなる。

その中をスタッフが逃げ惑うという異常事態を、夏美は当事者として見ていた。

「夏美さん、こっちへ」

異常事態にいち早く順応した小雪が夏美とモアの手を引く。

2人はふらふらと引かれるままに走り出した。

「小雪ちゃん、冬樹は……」

「分かりません」

その言葉に、夏美は手を振り払った。

「「夏美さん――」」

「冬樹を探して――」

その言葉は途中で途切れた。

「キャッ」

悲鳴を上げ、倒れ込む。夏美がぶつかったのは半魚人だった。半魚人はゆっくり夏美を見やると、おもむろに手を伸ばした。

「嫌……」

「夏美さん!!」

小雪が小刀を構えた、刹那だった。

「嫌ああッ!!」

「夏美さん!!」

夏美が悲鳴を上げる。

引きずられた先は、上。

「あ……」

時は既に遅かった。

クラゲに似た生物に絡め取られ、引きずり込まれる。

「……あれは」

小雪は意識を失う寸前、確かに小さな人影を見た気がした。

「ひゃ……」

拮抗していた力が抜け、弥々華は前に転けた。

「なんなの？」

半魚人や、巨大蟹が、割れた窓から出て行く。

「ああッ!! 大変だあ」

突然の声に、弥々華は首をぐるりと回す。

「え……」

そこにいたのは巨大なクラゲだった。

「嘘」

中に、モアと夏美と小雪を入れて悠々と宙を舞っている。

「夏美!!」

「小雪殿」

「モア殿!!」

ギロロとドロロ、ケロロは夢中で飛び上がった。
それぞれの得物を構えて。

だが

「ぐあっ!!」

「くっ!!」

「ゲロツ!!」

1秒も掛からなかった。

弥々華は口を開け、落ちた3人を見ていた。

「な、なん」

「全く、下等種が。喧しい事極まりないな」

弥々華は言葉を無くしたまま、視線を上によらず。

「お前……誰だ!？」

二等身の男は、弥々華を静かな眼で見据えた。小さく鼻を鳴らす。

「私はザール。水底よりこの星を統べる者。暗黒の海底王だ!!」

T o b e c o n t i n u e d

File 6 占拠

「な……」

ケロロは理解出来ないと、頭を振った。

夏美達が捕まりケロロは頭に血が上るまま、クラゲに似た生き物を攻撃した。だが、気が付いたら自分は地に伏していたのだ。自分だけでは無い、ギロロもドロロも同じように。さしたるダメージは無い。

だがその事実が、体を凍り付かせた。

「なにが起きたでありますか……？」

「隊長！！ 上ー！！」

弥々華の絶叫が、ケロロの耳に飛び込んだ。ケロロは無意識に見上げる。

「ゲ……」

あれは……。

考える間も無かった。生き物は太剣を振りかぶる。ケロロは目を閉じた。

「あぶねえー！！」

火花が散る。ケロロはゆっくりと目を開けた。

「クロ殿？」

黒猫と生き物は切り結ぶ。

「面白いー！！」

生き物はにやりと笑んだ。クロも凶悪とも言える笑いを見せる。

「ザールとか言ったな。テメエ何者だッ」

生き物、ザールはクロの剣をいなし距離を取った。

「言っただろう。私は水底からこの星を統べる者。新たなこの星の『王』だ」

「……」

クロは白けた目でザールを見た。

「一体何人地球を狙ってんだよ」
「確かに……ってかツツコンでる場合じゃないでしょ」
弥々華は小さく呻いた。

「みんな、こつち!!」

ミーは必死で手を振る。

彼の後ろには剛とコタロー・鈴木の様子があつた。

「多分ここから出られるはずだ」

ミーは厨房に入り込むと、搬入口を蹴り開けた。
その時だった。

「逃がしませんよ」

耳元に声が伝う。

「誰だ!!」

ミーは慌てて振り向き、硬直した。

「剛くん!! コタローくん!!」

剛とコタロー、鈴木は半魚人のような生き物に押さえつけられていた。

「クソ!! 3人を離せ!!」

ミーはお腹にあるポケットから大剣を取り出した。

「させません」

その声にミーはとっさの反応を見せた。

投げられた何かを弾く。

「これ……」

投げられたのは包丁だった。包丁は床や壁に突き刺さる。

「うわっ!!」

ぼんやり考える暇は無かった。両手の包丁から放たれた斬撃を受け

止める。

「連れて行きなさい」

斬撃を繰り出した張本人は凜とした声で命令すると、さらに包丁を使い切りかかる。

「なにするんだ、止める！！」

「殿下の御命令には背けませんので」

淡々とした口調で告げた生き物は更に攻撃の手を強める。

「壊れなさい」

生き物は手に持った包丁をミーの目に突き立てようとした。ミーは思わずかわす。

「かかりましたね」

生き物は僅かに口角を上げた。体をひねりもう片方の手に持っていた包丁をミーの四肢に突き刺した。

「あ……」

視界に電気が散った。

「剛くん！！ コタローくん！！」

ミーは叫ぶ。だが、間に合わない。

「だあっ！」

「ふん……」

クロの大ぶりの斬撃を、ザールはほぼ紙一重でかわしていく。

「甘いな」

金属がこすれる音が鳴る。

耳障りな音にクロは顔をしかめた。

ザールは剣先を地面に付けた。

「な……！！？」

剣が消える。バランスを崩したクロを見てザールは笑んだ。片手を地面に付け宙返り、さらに頬に蹴りを打ち込む。

クロはふらりと地面に倒れた。

「他愛ない」

くくと、喉の奥で笑い声上がる。ザールは大剣をクロに突きつけた。

「死ね、ガラクタ」

「死ぬかよ!!」

クロはとつさに腹部の収納場所に手をつ込んだ、瞬間だった。

「風華招来!!」

黒い影がクロには、はっきりと見えた。

「な」

「チツ!!」

ザールは振り向きざま、横にかわす。

クロの数センチ隣に、衝撃波がめり込んだ。

「逃がすかつ」

弥々華は地面に足を付け、体をひねる。地を這うように姿勢を低く取ると、真下から斬りあげた。斬撃が、噛み合う。鉄を削るような音が耳障りだった。

「ッ!？」

声を上げたのは弥々華だった。均衡が瞬間的に崩れる。がら空きになった腹部に入ったのは、体重の掛かった蹴り。

「痛……って」

小さいからさしたる力は無い。

その理屈は通用しなかった。

込み上げた胃液を飲み込み、見上げた時にはもう遅い。

一閃が、左肩を裂く。

「あ……」

血が噴き出す。鮮血に脳が染まる。

腕がもぎ取られないのが不思議なほど、鮮やかな斬撃。傷は深い。

腰が抜けた。

「ああああああ！！！」

「弥々華！！！」

ギロ口が銃を構える。

ザールの唇が笑みの形を作った。

「時間稼ぎはここまでにしようか？」

足音が、ゆっくりと響いた。

弥々華は絶叫することを止め、力無く地に伏していた。

ザールは嘲笑とも言える笑みをこぼしながら、メアボールを掲げる。

「貴様等にかかずらう暇は無いのでな。さらばだ、下等種諸君」

「待て！！！」

その瞬間だった。

閃光と爆音が辺りを覆い隠す。

「うわっ！！！」

目を覆った手をどけた時には遅かった。

ザールの姿は、既に消え失せていた。

「全く、閃光手榴弾を撃ち込んでくるとは……」

スタングレネード

ガラスや瓦礫でとつちらかったレストランの残骸で、ギロ口は腕を組み呻いた。先の戦いからは1時間も立っていない。他の面子は辺りの様子を見に行っていた。

「奴ら一体何者なのだ？」

「さあな」

独り言とも言える言葉に、律儀に返事を返したのはクロだった。ギロ口は閉じていた目を開け、斜め下を見下ろす。

クロは座ったまま、辺りを見回していた。

「ただ地球を狙ってるんだ。ほっとく訳にはいかねーだろーが」
「……そうか」

面喰らった顔をしたのはギロロだった。単なる好戦的な奴かと思っ
たが、違ったようだ。

「おいキッド!!」

「なんだ、マタタビ」

レストランの奥を見に行っていたマタタビの声がつかの間の静寂を
割いた。クロは面倒だと言わんばかりの態度で立ち上がる。

「やっと見つけたぞ」

何かを引きずるような音を立て、現れたマタタビにクロとギロロは
息を飲んだ。

「ミー君」

手足に付いた傷は痛々しい。僅かに走る電気が更にそれを引き立て
る。

「厨房の壁に貼り付けにされていた」

「無事か？」

ひらりとミーに近寄ったクロは無意識に舌打ちを落とした。

手足のケーブルに傷が入っていた。これでは動かす事もままならな
いだろう。

「チッ……剛の野郎はどこ行った？」

「拙者には分からぬ。コタローも鈴木も剛も、姿は見えん」

「ハア？ コイツと一緒に逃げたんじゃねーのかよ」

その時だった。

「剛……くん……」

クロとマタタビは顔を見合わせた。

「大丈夫か？」

「マタタビくん？」

ミーはゆっくり首を縦に振る。

「2人とも。大変なんだ。剛くんたちが変な生き物に連れて行かれ
たんだ」

その言葉と共に跳ね起きそうになったミーを2人は押さえつけた。

「すまんが……」

3人はゆっくりと振り返る。

「何があつたのか事情を教えてくださいませんか？ ミー」

ギロ口の落ち着いた声に、3人はまた顔を見合わせた。

「殿下」

そこは、とても広い部屋だった。天井には巨大なシャンデリアが垂れ下がり、淡く青い光が部屋を満たしていた。

「原住民の収容を完了致しました」

「そうか」

玉座と言うに相応しい椅子に座るザールは退屈そうに頷いた。

「戦況は？」

「このドーム……海底都市の占拠を完了致しました。生き残りはケロン人数名と原住民が1人。それと機械猫が2体に猫が1匹、機械人形が1体です」

一息で言い放ったフィールに、ザールは満足げな笑みを浮かべた。

「分かった、後で始末する。だが今は放っておけ」

「はい……？」

「空腹だ。何か喰いたい」

フィールの口が開いたまま固まる。失念していた。殿下はこういう人だった……。

「どうした？」

「い……いえ。只今何か持って参ります。殿下」

そう言つて駆け出したフィールの背中を、ザールはぼんやりと見つめた。

その時だった。

「失礼致シマス」

フィールと入れ替わりになった半魚人……ザールの作り出した僕^{しもへ}『ナイトメア』はうやうやしく腰を折った。

「どうした？」

「ゴ連絡致シマス。『クラークン』様が到着ナサレタト、通信ガ入リマシタ。如何ナサイマス力？」

「すぐに行く」

ザールの返事は速い。

「クラークンに伝える。『今に餌を好きなだけ喰わせてやる。少し待て』と」

「了解シマシタ」

また腰を折り駆け出したナイトメアを見たザールは、笑い出した。

「くふふ……ふははは……遂に駒は揃ったぞ。遂にこの日が来たのだ。覚悟しておけ、貴様等は必ず叩き潰す……！」

狂ったように笑いながらザールは言い放つ。ザールの目に映る物。それは復讐に等しかった。

T o b e c o n t i n u e d

File 7 それぞれの思い

暗い部屋に、夏美はいた。

吸い込む息が冷たいのは気のせいではないだろう。

「一体なんなのよ？」

力無い呟きは、何十回と繰り返されたものだった。

「夏美さん……」

その声と同時に手のひらに温かい柔らかなものが触れた。

「大丈夫。絶対ドロ口達が助けに来てくれます!!」

「そうですよ」

夏美の肩にも温かな何かが触れた。

「おじさまはきつと来ます。ってゆーか救出作業？」

2人の手のひらは温かい。それが夏美を勇気づける。

「小雪ちゃん……モアちゃん……」

涙が頬を伝う。

「そう……だよね……。なに心配……してるんだろ……私。ギロクもボケガエルも……来てくれるよね……」

手のひらで伝う涙を拭う。深呼吸をすると、浅い呼吸が落ち着いてきた。

その刹那だった。

不意に3人の目の前のドアが、開いた。差した光が、暗闇になれた3人の目を貫く。

「……うわ!!」

「大人シクシテイロ。下等種メ」

ひどく片言な言葉が鼓膜を叩く。目の前の半魚人ことナイトメアは、部屋に誰かを放り込むとドアを勢い良く閉めた。

ボタンと言う音に、夏美達は呆然とドアを見つめる。

「何をするんだ!!」

「乱暴だなあ……いたた……」

「一体ワシらが何をした!？」

「痛ったあ……みんな大丈夫？」

若い青年の声、幼い少年の声、年を重ねた男の声に続いた声に夏美は固まった。

「冬樹？」

「え、姉ちゃん？」

夏美はゆっくり指先を伸ばすと声の主に触れる。

「冬樹!! アンタまで捕まっちゃったの？」

「うん、そうなんだ。それより大変な事が分かったんだよ!!」
冬樹の声に興奮の色が混じった事に夏美はため息を吐き出した。

「これは……」

海底都市は既に廃墟と化していた。瓦礫も弾痕も無いが、ここは廃墟だ。

ケロロには分かる。

奪い尽くされた街だ。ここは。異星人によって所有権と自由を奪い尽くされた街。

それはまるで

【……殿……隊長殿】

「なんでありますか？ ドロロ兵長」

ドロロから入った通信がケロロを現実に戻した。

【そちらの様子は？】

「そっちと変わんないと思いますよ？ 誰もいないでありますし」

ケロロは辺りを見回す。

「あ、一応聞くでありますがそっちの様子はどう？」

【酷いものでござる……そうでござろう？ タママ殿】

【そうですね。人気も全く無いですう】

たった一語、その言葉がケロロの心を重たくした。

「了解であります……やっぱりでありますなあ」

ふと見上げた空は暗い。

ぴくりと弥々華の指先が動く。開いた目に、ナナは安堵のため息を漏らした。

「だ、大丈夫？」

弥々華の眼球が、左右に揺れる。その目がナナを捉え、動きを止めた。

「大丈夫」

乾いた声だった。

「それより、今はどうなってるの？」

天井を見つめる瞳はひどく冷静で、不気味なほどだ。

「今、マタビさん達が様子を見に行ってるよ。それより、怪我した所、痛くない？」

「痛くない訳ないじゃん……まじ痛いから……」

弥々華は控えめに呻くと、肩に手をかざした。

「忌術、光癒」

手のひらから溢れ出した光が、弥々華の肩を癒やして行く。

「……あなた超能力者なの？」

目を見開いて問いかけたナナに、今度は弥々華が首を傾げた。

「超能力者？ それって予知能力とかテレポーテーションとか念動力の事？」

「そつだよ」

弥々華の出した例に、ナナは軽く頷いた。

「アタイの周りにもそういう子がいるんだ。あなたもそうなの？」

「違うよ。あたしは能力者。空は飛べるけど、物は浮かせないし…

…。予知も瞬間移動も無理だし。戦い方も剣術一本だしね」

「そうなの？」

「うん」

弥々華はへらりと頷くと、手をよけた。肩の傷は跡形も無く塞がっている。とは言っても着ていた服はざっくり裂けていたが。

「あちゃー。これ気に入ってたのに……」

弥々華は至極残念そうな顔をしたが、不意に真面目な顔になる。

「一緒にいてくれてありがとね。助かった」

弥々華はそう言って幼い笑みを見せた。

「……ギロ口さん達に伝えてくるね」

「分かった。あたしも行くよ」

「でも、あんな怪我して……」

「大丈夫だよ。もう治った」

その言葉に大小並んだ2つの背中が揺れた。

海水が部屋を満たす。

息苦しさは無い。あるのは心地良い冷たさだけだ。

部屋のドアが開いた。

ザールはゆっくり泳ぎ出す。手足はほとんど動かず優雅なフォームは崩れない。

「オイ……聞こえるなら返事をしろ」

口元から泡が溢れた。

暗い海に音が伝わる。

その時だった。

それは形容しがたい音だった。海の底から轟く、甲高い音。背が凍るような化け物じみた鳴き声が響く。

その声にザールは至極愉快そうな笑い声を上げると左手を闇へ伸ばした。

「久しいな。クラーケン」

その声に呼応するような鳴き声が辺りに響き渡る。それはまるで悪夢の始まりのように。

「それで、あたしが寝てる間に何があったの？」

弥々華の声には僅かな苛立ちが宿っていた。ここはホテル、ケロロ達にあてがわれた部屋だった。

目の前にはベッドに横たわるミーが大人しく修理されていた。

「僕のせいだ……僕のせいで剛くんが……」

「黙りな。手元がくるう」

クルルは工具を手に、ミーの手足をいじっていた。

「ミーくんが修理されてんのがそんなに珍しく見えんのか？」

「そうじゃない」

弥々華は間髪入れず冷静に返す。

「なんでこんなにボロボロな訳？ ミー……くんは」

呼び捨てにするか否かの逡巡を除き、弥々華は質問をクロにぶつけた。

「厨房の出入り口から逃げようとした所をやられたそうだ」

その声に弥々華は振り向く。

「ギロロ」

「数名連れ去られたらしい。俺達に似た女と半魚人に」

「ケロン人？」

弥々華の問いにギロロは首を振った。

「分かん」

「いや、分かるぜえ」

その言葉に全員の目が吸い寄せられた。

「終わったぜ、ミー」

「ありがとう」

工具を置いたクルルに、クロが口を開いた。

「オイ！！ ミーくんを襲った奴が分かるって……」

「コイツをアンタ達が連れて来るまで俺が何もせず黙ってたと思うのかい？」

クルルは笑う。

「監視カメラのログ。見るかい？」

ナイトメアは小さな背中をやつと見つけた。ここは研究施設の一部なのだろう。沢山のパソコンが並んだ部屋だ。

「フィール様」

「何かしら？」

その声にフィールは声だけで返事をした。フィールの目はモニターに釘付けのままだ。

「才食事ノ準備ガ整イマシタ」

「そう」

フィールはモニターを切ると立ち上がった。

「ザール様ノ所へ行カレルノデスカ？」

「ええ」

「デシタラ、キット海中へ出テオラレルト思イマス。クラーケンガ

イラッシャイマシタカラ」

その言葉に立ち上がったファイルが静止した。

「そう、クラークンが……」

「ハ」

その言葉はナイトメアの喉に留められた。

「ア……アア」

「クラークン『様』は殿下の細胞を持つ僕。^{しもべ}貴様如きナイトメアが呼び捨てて良い方ではありません」

ナイトメアの喉に食い込むのは小さなカッターナイフだった。科学者の忘れ物が、今は凶器と化していた。

「……ア」

「忘れないように」

「了解……致シマシタ」

カッターが首を離れる。

「私は殿下の所へ行きます。あなたはクラークンの食事を用意して頂戴」

「ハイ」

「分かればいいんです」

そう言つてファイルはカッターを投げ捨てる。それが壁に突き刺さった。

「次はありませんよ。ナイトメア」

その言葉に、ナイトメアは戦慄すら覚えた。

T o b e c o n t i n u e d

File 8 加速する真実（前書き）

本文中にグロテスクと思われる描写が登場します。
苦手な方ご注意ください。

File 8 加速する真実

パソコンのウィンドウを覗き込む。弥々華はクルルの頭に顎を乗せるような形になった。他の面々もくつきあう形で覗き込む。

ウィンドウは砂嵐。映像が巻き戻されているが弥々華には良く分らない。

「あ、映った」

弥々華は間の抜けた声を上げた。映像はクリアとまでは行かないものの、何が起きたか分かる程度には映っていた。

クルルがキーを押すと映像が止まる。壁に釘付けにされたミーを見た本人がため息を吐き出した。

「我ながら情けないよなあ……」

クルルはその言葉を見無視して、映像を拡大する。

「コイツか？」

大寫しになったのは藍色の二等身だった。

「コイツ、オイラ達を襲った奴じゃねーか!？」

「違うだろう。明らかに女だ」

「分かるのか？」

怪訝な顔のマタタビに、ギロロは苦々しい表情を浮かべた。

「前に似たような奴を見たことがある」

「それってまさか、この前の事件の事？」

弥々華が問いかけた言葉にギロロは頷く。

「あのザールと言う男もだが、見覚えがある。たしかマロン星の侵略部隊だったか？」

「メールとマールだっけ……たしか」

「ねえ、ギロロさん。その人達と知り合いなの？」

口を挟んだのはナナだった。

「まあそんなところだ」

ギロロが頷く。

「で、クルル。なにか分かるか？」

「目下搜索中」

「そうか……」

ギロ口の返答を最後に、部屋に沈黙が落ちた。

「あれ？」

「どうしたんですか？」

ドロ口は屋根の端に立ち、静止する。タママは地面からそれを見上げていた。ドロ口は視線を1点に集中させ、動かない。

「生き残りがいる」

「え、本当ですか!？」

タママはキョロキョロと辺りを見回すが人影は無い。

「ここからはあまり遠くない……タママ殿はそこで待っていて欲しいでござる」

「え、遠くないって……」

その言葉は途切れた。ドロ口はその場所からとつくに消え失せていた。

「本当なの？」

コタローの声に夏美と冬樹は顔を見合わせた。

冬樹が話したのは地下遺跡で見た壁画の話だった。

元々オカルトめいた噂があった遺跡だ。

壁画に描かれていたメールやマールに似た宇宙人の墓標、実質的には封印場所と言う冬樹の仮説は的を射た物に感じられる。

「ありえない話じゃないですよ。僕らも経験済みですから……」
軽く俯いたのは鈴木だ。

「僕、宇宙人とは縁があるんです。でもこんな事に巻き込まれるとは、思いませんでしたよ」

「そうなんですか？」

冬樹は軽く聞き返した。その時だった。

「助けてくれえ!!」

全員が顔を見合わせた。声は室内ではなく廊下から響く。情けない男の物だ。

「暴レルナ。ヤカマシイ」

「俺はまだ死にたくない!! 助けてくれよぉ!!」

焦燥しきった声だった。耳を塞ぎたくなるような悲鳴にも等しい。

「黙レ。命ゴイナド無駄ダ」

「止める!! 止めてくれ!! 餌なんてごめんだ!! だから止めてくれ!!」

「黙レ家畜メ」

大した言われようだ。

夏美は無意識に膝を抱え直した。声はだんだん小さくなり、ゆっくりと消えた。部屋ではため息が重なる。

「何だったんじゃろうか？」

「きつと良い事じゃないですよ。博士」

コタローの言葉を最後に、部屋に沈黙が落ちた。

「あれは……」

ドロロは伝っていた屋根に足を止めた。黒いマントをなびかせ走る男の姿がよく見える。もつれた足を必死に動かす姿は情けないという言葉が似合うだろう。

ドロロは音もなく地面に飛び降りた。そして素早く男の前に立ちふさがった。

「大丈夫でござるか？」

「ひ……」

男は無様にも崩れ落ちた。

完全に腰を抜かしている。

「助けてくれ……命だけは……」

「いや、拙者にそんなつもりは……」

ドロロは必死に冷静さを保とうと深呼吸する。消毒液のわずかな匂いが鼻に付いた。

「失礼でござるが、あなたは研究施設にいた方ですか？」

「そそそ……そうだが？」

完全に声の上擦っている。だが間違いないようだ。

「こちらへ。仲間がいる所に案内するでござる」

そう言つてドロロは科学者の腕を掴んだ。

「さあ、立つて」

「触るな！！ 化け物が」

そう言つて男は駆け出した。

「あ、待つて！！」

追いつけない速さでは無い。だがドロロは立ったまま動けなかった。

この拒絶は自分では無理だ。

自分は地球人では無い。

無意識に頭を降った、その時だった。

【ドロロ兵長ー。聞こえるでありますか？】

「隊長殿？ 聞こえてるでござるよ」

軽く耳を押さえる。慣れ親しんだボーイソプラノに、ドロロの心が和らぐ。

【タママから聞いたんだけど、生き残りがいたんでありますか？】
「……逃げられたよ」

【ゲロ？ ドロロから逃げたんでありますか？ すっげー】
無線機の向こうのケロロは妙に感心したような声を出す。

「はは……追いかけられなくて……逃がしちゃった……」

ドロロは自分が想像以上に傷ついているのを感じた。口調が何よりの証拠だ。

【泣くなよな。こんな所で】

「泣いてない……でござる」

無線機の向こうでため息が聞こえた。

【ま、いいや。タママ連れてホテルに戻って。我輩も戻るであります。ざっと様子は掴めたし】

「承知。して、生き残りは？」

【後で弥々華殿を行かせる。地球人なら警戒薄れると思うでありますし】

「了解」

ドロロは無線を切ると、駆け出した。

声にならない絶叫が糸を引いた。

白衣が水に揺れる。

男は恐怖の視線で必死に泳いだ。だが、その抵抗も無駄に過ぎない。
男は暗い海の底に引きずり込まれた。

「美味いか？ クラーケン」

ザールはその様子を見ながらククと笑う。血の匂いが立ち込めた。
その時だった。

腕が流れて来たのは。

ザールはゆつくりと鮮血のまわり付く腕を掴んだ。

口に運ぶ。

その一部始終を見ていたフィールは無意識に口を押さえた。

「味が落ちたな……昔はもつと旨かった。で、フィール。何故ここに来たのだ？」

「殿下、御食事の用意が整いました。それと、すみませんが1つ頼み事があります」

「なんだ？」

「中の生き残りから、こちらに数名引き抜きたいのですが」

ザールは骨を口にくわえたまま、しばらく視線を揺らす。

「たかが無能な力エルどもとガラクタの鉄猫だぞ」

「構いません」

「好きにしろ」

素っ気ない返事と共に骨を噛み砕いたザールにフィールは一礼した。

「見つけたぜえ」

クルルは静かに笑い声を立てた。口元が三日月を描く。

「本当か？ クルル」

「ああ間違えねえよ。隊長達が戻り次第説明するぜ」

クルルがまた笑った、その時だった。

「ねえ、クロ。なんか音しない？」

「「音お？」」

窓に背を向けてベッドに腰掛けていた猫トリオが、顔を見合わせる。

「うん、ひゅるるるって感じの音」

「どれどれ……」

クロがそう言っただけで耳を澄ました瞬間だった。

「嘘でしょ……」

弥々華が叫ぶ。

その言葉と同時にだった。

部屋を爆音と熱風が包み込む。

窓の外から飛び込んだ突然の爆弾に、全員が壁や床にキスする羽目になった。

「……なんだったんだ」

「オイラが知るかよ……」

マタタビとクロが頭を撫でさすり起き上がった。

「天井に着弾したようだな」

ギロ口が見上げる先を、ミーも眺める。

「本当だ、焦げてる」

「危なかった……」

弥々華はぺたりと地面に崩れ落ちた。鼻先を爆弾が掠めたのだ。

「でも一体誰がこんな事を」

「考える余裕はありませんよ」

奇妙なほど落ち着いた声がナナを遮った。

「あ、お前は!？」

ミーが指差した窓の外。

そこにいたのは、空中で不敵に微笑むフィールの姿だった。

T o b e c o n t i n u e d

File 9 復讐の牙

「あ、お前は！！」

「ああ……貴様、あの時の出来損ないですね」

それは余裕のある笑みだった。口角は上がっているが、目はどこまでも冷たく敵意もあふれている。だが余裕を感じさせる不敵な笑顔だ。

「一応、名乗っておきましょうか。お前呼ばわりは心地よいものではありませんし」

笑みを浮かべたまま言い放つ。

「私はフィール。マロン星王家、第2王子・ザール殿下の側近をさせて頂いております。以降お見知りおきを」

フィールはそう言つて、うやうやしい一礼をした。あまりに隙の無い立ち振る舞いに、弥々華とクロは口をあんぐりと開けてしまった。なにせ状況と立ち振る舞いが不釣り合いなのだから。

「剛くんをどこへやつた？」

ミーだけは状況を見失わずにいられたらしい。問いただす声は低い。冷たい敵意がフィールに向けられた。

「剛？」

フィールは身じろぎ1つしない。ただしその目は理解出来ないと言わんばかりに泳いでいる。

「剛くんだよ！！ お前達が捕まえた！！」

地団駄を踏み始めたミーの肩をクロが叩いた。

「卵みてえな体したオッサン知らねーか？」

「ああ」

ポンとフィールが手を叩く。

「先ほど捕らえた原住民ですね。あれなら多分、これからザール殿下かクラーケン様がお召し上がりになるでしょう。もしかしたら侵略用の兵隊にするかもしれません。まあどちらにせよ生きてこの

先、生きのびられるような事は有り得ないでしょうね」

言いよどむことすら無い、あっさりした事務的な言葉。その言葉にミーの顔が青ざめて見えた。

「…… 剛くんの敵はそのまま僕の敵だ」

静かな言葉。敵意が殺意に変わる。

「剛くんを返せ!!」

ミーはお腹に開いた収納スペースに勢い良く手を突っ込んだ。残骸と化した窓枠に足を掛け、飛び上がる。

真上から叩きつけるような斬撃。

フィールは空中でそれを紙一重でかわす。

「地を這う事しか出来ない下等種に何が出来るのですか?」

ミーは正面のビルを蹴り、地面に降りる。

「ちくしょう…… ウイングさえあれば」

「なるほどね」

その言葉に、ミーは顔を上げた。

「下等種とか、好き勝手言ってくれるじゃない? フィール」

「弥々華」

窓枠に足を掛けた弥々華はニヤリと笑う。

「ミーくん!! これ使って」

そう言っ放り投げられた鉄の塊を、ミーは必死にキャッチした。

「これ……」

「ケロン軍謹製・飛行ユニット。背中につければ飛べるよ」

「喋り過ぎだ。馬鹿者」

ギロロの苦言が、ミーにもはつきりと聞こえた。

「よっしゃ、じゃあそろそろリベンジと行こうか? フィールさんよ?」

小馬鹿にしたようなクロの声に、フィールは顔を歪めた。

「ケロン人め…… いつの間にそんな物を」

「行くぜ!!」

その言葉がスタートとなる。

窓枠から3つの影が飛び出した。

「で、これからどうしよう?。」

冬樹は体育座りのまま、暗闇に問いかけた。部屋は相変わらず暗い。
「とりあえずここから出ませんか? 師匠達ばかり頼るのもどうか
と思いますし」

「師匠?」

「クロちゃんの事だよ」

少し離れた場所から、夏美へコタローが答えを返す。

「私も同感です。でもどうやって出ればいいんですかねえ」

小雪の問いかけに、肯定的な返事をする物はいなかった。

「ピッキングもこの暗闇では難しいしの」

「そうですねえ」

物騒な言葉を吐き出したのは剛とコタローだ。

「あの……」

その声に、全員の視線が動いた。控えめな音量が空気を揺らす。

「私に任せて下さい」

「モアちゃん?」

夏美が、毒気を抜かれたように呻いた。とても嫌な予感がする。

「ドアはここですよね。皆さん、出来るだけ離れて下さい。ってゆ
ゝか頭上注意?」

モアから全員がじりじりと離れる。背筋を何故か、冷や汗が伝った。

「擬態解除」

「モアちゃん?」

何か重たいものを振り回す、ぶんぶんと言う音が空気を裂く。

「ハルマゲドン・1/1000000000《1億分の1》!!」

轟音が、耳を伝わる。

次いだ粉塵が、そして光が、ドアを突き破った事を全員に伝えた。

「さあ、行きましょう!!」

後光が差したようなモアの天使にも似た柔らかな笑みが、その時悪魔のように禍々しく見えた。

後に鈴木一郎が思った事である。

かわされる。

弥々華は小さく舌打ちを漏らした。

「うおらっ!!」

「食らえっ!!」

クロとギロロは空中に静止すると、それぞれガトリングとビームライフルを打ち出す。フィールはそれを上下左右に軽くかわした。

「こんなものですか……情けない」

ギロロとクロは背中合わせてフィールを睨みつける。それを追い越すように、弥々華とミーは飛びかかった。

ミーが詰め寄り、弥々華は様子を見るように距離を取る。ミーの大剣が何度も空を斬る。

「なんで」

立て方向に叩きつけても、

「当たらないんだ」

横に斬りつけても

「よお!!」

隙を見せず放った突きも当たらない。

回転を加えた斬撃を放とうとした瞬間だった。

「いや!! 当たる!!」

叫んだのは弥々華だった。

「な」

刀を捨てた空に飛んだ弥々華の踵が、きれいにフィールの顔面にめり込んだ。

体重を綺麗に乗せた踵落としが、フィールを地面に叩き落とした。

「……今だッ!!」「……」

4人の声が重なる。

「任せろ」

窓枠から響いたのはマタタビの声だった。そして響くのは空を裂く音。

弥々華はまた空中に舞い上がる。

ガキリと、鈍い音がした。

「甘い……ですよ……」

ククとフィールは嗤^{わら}う。

「な……拙者のすてるすブーメランが……」

フィールは構えたメアボールを気怠げに振り上げた。

姿を見せず全てを切り裂く、故にステルスの名を冠されたブーメランが地に落ちる。

「一撃頂いたのは、誤算でした」

フィールは片手で鼻をこする。

「遊びすぎたのが拙かったのでしょうかね」

ゆつくりとフィールは宙に浮き上がった。その顔に表情は無い。

「そろそろ本題に行かせて頂きますよ、皆さん。時間は稼げたようですし、ね」

フィールのメアボールが形を変える。

「させるか!!」

飛びかかったギロ口に、フィールは妖しげな表情を浮かべた。

「流転狂詩曲・序曲：復讐の牙」

その言葉と同時に電子的な弦楽器の音が、空気を切り裂く。

「う……ぐあ!!」

「なんなんだよ……!!」

「頭が……変になりそうだ!!」

「耳痛い!!」

「気が狂いそうだ……ッ!!」

それは大音量の不協和音だった。フィールがかき鳴らしているのはショッキングピンクを基調とした小ぶりなエレキギター。音の発生源はそれであった。

「この程度では終わりませんよ」

フィールが一際強く、ギターをかき鳴らした、瞬間だった。

「あ……」

奇妙な感覚が、弥々華の頭に走る。

「なんなの……さ」

フラッシュバック、若しくは走馬灯。

その言葉がふさわしかった。

「頭の中……覗くなあ!!」

弥々華は必死に耳を塞いで、叫ぶ。記憶が蘇っては消え、蘇っては消えていく。頭の中をかき回されたような感覚が吐き気に変わる。

「止めて!!」

涙が出てきた。もう嫌だった。

「使える人材はいるようですね」

フィールはそう言つて、目を開けた。

「フィニッシュです」

技巧に走る指先が止まる。

「あ……」

記憶を除かれる感覚はそこで止まった。ひゅうひゅうと喉になる。

「……なにが起きたでありますか?」

全員が硬直する。

「隊長?」

弥々華がはつきりと呟いた。

「弥々華殿、それにみんな……何が起きてるでありますか?」

ケロロは僅かに息を切らしながら全員に問いかけた、その時だった。
一筋の銃声が、ケロロを撃ち抜いた。

「……ギロ……ロ？」

ケロロは目を見開いた。

彼の視線の先で、ギロロは銃を構え、立っていた。

「……嘘……で……ありません？」

「生憎、嘘ではない」

その言葉に、弥々華の背が凍る。本気の重低音が響く。

血を流すケロロを見下すその瞳は、灰色に染め上がっていた。

T o b e c o n t i n u e d

File 9 復讐の牙（後書き）

どこかで、今まで連載してきた作品の話数カウントを統一しようかなと思います。

統一対象はCross world無印と2・超小説版無印と2になるかなあと思います。

多分EpisodeとFileになるかなするかもしれないです。

まだ、未定ですが。

決まったら統一します。

「なんで……」

弥々華は完全に腰を抜かしていた。

「なんで!」

「弥々華、口を挟むな」

ギロ口は左の頬を何気なく撫でた。はつきりした拒絶を含んだ声音は冷たい。

「なあ、ケロ口」

ケロ口は撃たれた場所を抑えながら呻いた。

「なに言ってるんですか?」

「忘れたとは言わせんぞ」

低く恫喝するような声に、ケロ口は視線を逸らした。

「何言ってるでありますか? おかしいでありますよ」

「可笑しい?」

今にも笑い出しそうな顔でギロ口は言った。

「『あの日』を忘れたか? そんな筈はないだろう、ケロ口」

ギロ口の手は、まだ頬を撫でていた。だが、それだけではない。ケロ口は気が付いた。

「その傷の事でありますな。思い出したであります。でも、それが」

「それがなんだと言うのだ? とでも言うのか? 怨んでいないとでも思ったか?」

生々しくギロ口に残る傷跡を、撫で回す。

「万死を持って償ってくれ。それが俺の慰みになる」

傷跡から手が離れた。その手に銃が転送される。

「本気のようにありますな」

ケロ口はそういうと、得意武器のモーニングスターを呼び出した。

「キッド」

背が冷えるような聞き慣れた声に、クロは振り向いた。

「マタタビ、テメーもか？」

「理解が早いのはありがたいな」

マタタビは眼帯を抑えたまま、クロにすてるブーメランを向けた。

「右目の恨みだ、死ね！！ キッド」

「やなこつた！！」

剣とブーメランが、かち合う。殺し合いにも等しい打ち合いに、クロは舌打ちした。

「殺れねえ」

「なにを言ってる！！」

「何でもねえよっ」

クロはそう言っ、また剣を振り回した。

ブーメランと剣が交錯し、火花が散る。

再会したあの日みたいだ。

そんな事を考えながら。

「なにが起きてるの？」

理解出来ない。

弥々華はまた頭を振る。

拒絶と始まった争い。

ギロロが撃ち出す弾丸をケロロは身軽にかわす。いつもとは違う、

キレのある動きだ。

「ギロ口……なんで……」

なんで？

そう思い辺りを見回す。

「まさか……」

頭痛と頭の中をかき回される感覚。そして現状。それが1つに繋がった。

「フィール!!」

足の下のアスファルトがはじける。歩術で弥々華は距離を詰めた。

「何をした？」

苛立ち這うような低音に射るような瞳。

「速いんですね。もつと愚鈍かと思っていました」

「ふざけるな!! 戻せよ、すぐに」

フィールは弥々華の視線と同じ高さで、表情1つ変えず浮かんでいた。一方弥々華の顔は蒼白で、呼吸も荒い。今にもつかみかかりそうな両手を必死で押さえていた。

「嫌です。彼らは私の率いる軍に入って頂くのですから。そんな事は出来ませんね」

弥々華はカツと頭に血が登ったのが、感覚で分かった。

「ふざけんな!!」

両手で襟首を掴んだのは半ば無意識だった。

「戻せよ!!」

「お断りします」

フィールはため息混じりに吐き出した。

「あまり邪魔をしないで頂けますか？ もつうんざりなんですよ。あなた方と話すのは」

その言葉と同時に、フィールは弥々華の腕を掴む。

「目障りです」

「ッ？」

気が付くと体が浮いていた。

「うぐッ!!」

地面に打ち付けられた背中が呼吸を一瞬止めた。腕の痛みがじりじりと伝わってくる。

「そろそろ行きます。これ以上邪魔はしないように」

腕が離された。弥々華は呆然と空を見つめた。指が鳴る。

「行きますよ。ギロロ、マタタビ」

銃を乱射していたギロロが、ブーメランを振り回していたマタタビが、止まる。

「了解」

「分かった」

呆然とするしか、無かった。

2人の口から放たれた言葉に。

「待つであります、ギロロ!!」

「……」

沈黙は、否定に等しい。

「ギロロ!!」

それでも離したくなかった。

「戻って来い!!」

大切な親友を。

「行くのか？」

一方クロはひどく冷静だった。

「ああ」

初めてでは無かった。こんな事件は。

「そうかよ」

だから、クロは信じた。

幼なじみの兄貴分を。

「なんだよ」

弥々華は、理解が追いつかなかった。

「なんでこんな事に」

責める理由も分らない。

ただ、悔しかった。全てが悔しかった。

小さくなる背中を、弥々華は齒を食いしばり見つめていた。

真っ白い廊下を走る一団がいた。先導するのはルシファー・スピアに乗ったモア、追いかけるように他の面々が続き、しんがりは小雪だった。

「で、コタローくん」

冬樹は息を僅かに切らせながら問いかけた。

「パソコンのある部屋に行けば、脱出できる道が本当に分かるの？」

「はい」

間髪入れずに返事が返ってくる。

「ここのデータベースに侵入できれば、脱出経路は分かります。プリンターもあれば地図が手に入りますよ!!」

「でもそんな事出来る訳？」

懐疑的な声を出したのは夏美だ。息を切らせる事もなく上手に走っている。

「多分出来ます」

「コタローくんは前にアメリカの空母も乗った事があるからの」
剛の言葉に、コタローは顔を赤らめた。

「そんな昔の事、引つ張り出さないで下さいよー」

「アメリカ……空母……へえー……」

「す……スゴいね」

思わず棒読み状態になった夏美と冬樹は顔を見合わせた。下手をすればこの少年、ケロロ小隊以上の危険人物かもしれない。

「あ、コタローさん。ここなんかどうでしょう？」

モアが不意にスピアを止めたのは、走り始めて3分くらいの事だった。

「大丈夫だよ。これだけあれば、行けます」

そう言って一行は部屋に駆け込んだ。

コタローは椅子に座るとパソコンを起動させる。

「あとは僕に任せて下さい！！」

その自信に満ちた顔へ、全員が頷いた。

「……うわ、工事現場だな」

弥々華が小さく呻いた。

ここは先ほど集まっていたホテルから少し離れた建物だ。隠れ家を狙われる事を避けるため移動せざるを得なかったためだ。

ちなみに入るときクロが叩き割ったガラスが軽く散っている。

「で、これからどうするの？」

そう言ったのは端に立っていたミーだった。

「僕は剛くんを助けに行くけど」

当たり前だ。と言わんばかりの声音だ。

「我輩達も突入するであります。冬樹殿や夏美殿を助けるでありますよ」

そう言ったケロロはコンクリートの床に座り込んでいた。撃たれた後は弥々華の治療のお陰でほぼふさがっていた。

隣には青ざめたドロロとタママがいる。状況を知ったせいだろう。

「でも、あたしたちケロロ小隊だけじゃあいつらに勝てない」

弥々華は静かにそう言った。

「敵の敵は味方……もしよければ力を貸してもらえないかな？」
おずおずと、弥々華はクロとミーを見た。

「武器は貸すから、協力して欲しい」

ケロロ小隊としての結論はそれだった。犠牲は少ない方が良い。

「力を貸す。か……」

クロはぼんやりと呟き返した。こんな交渉は初めてだった。

「ザールの野郎をぶちのめすついでになら手伝ってもいいぜ？」

少しの沈黙を置いたクロはそう言って笑う。

「クロ……!!」

「僕も出来る事があつたら手伝うよ」

「ミー殿!!」

2人の目がキラキラと輝いた。

「決まりだなあ」

クルルは気怠げにキーボードを叩いたまま全員を眺めた。

「とりあえず次第状況を説明する。異論のある奴は？」

沈黙は肯定だった。

「ククッ……」

クルルは小さくのどの奥で笑い声を出した。

T o b e c o n t i n u e d

「まずはこれを見なあ」

クルルのノートパソコンを全員が覗き込む。ディスプレイに映し出されていたのは、ザールとフィールの顔写真だった。

「分かったことは2つ。まずザールの正体だが……こいつはマロン星の王子だ。ただ、ちよつと前に追放処分を受けてる」

「王子様？」

ナナの顔が輝いたのを見たクルルは陰湿に笑う。

「お前の考えてる王子とは違うと思うぜえ」

ククツと笑うクルルにナナは頬を膨らませた。

「ちよつと待つて……マロン星は王政では無かったはずでござろう？」

「そうですね。訓練所では確か民主制だつて習ったですよ」

話の腰を折り異論を唱えた2人にクルルは笑って見せた。

「王政だった時代があんだよ……。で、追放処分を受けた理由だよ。マロン星は現在、侵略を止めてんだろ？それが決まる時侵略は止めないと突っぱねた挙げ句、側近とクーデターを起こして王座を狙ったらしい」

「でも、なんでそんな人が地球侵略を？」

「大方地球を根城に星への復讐……とかかもな？」

「まどろっこしい。それでフィールの正体は？」

問いかけたのは弥々華だ。

「アレはザールの側近だ。マロン星でクーデターを起こし、ザールを王様に仕立てようとした張本人」

クルルはフィールの写真を拡大した。

「ザールは単純にその実力が厄介だ。だがこいつはそれだけじゃねえ……。音により人の記憶をかき回し、復讐へと駆り立てる。そして心を掌握する。心当たりはあるだろ？」

「……それどういう意味だ」

クロは明らかに怪訝な顔をした。全く分からないのか、明後日の方向を見たまま腕を組んでいる。

「要するに恨みつらみを思い出させて、最終的には心を操る。そういう事でござるな？」

「過程を無視すればな」

クルルはだるそうに返事をする、またパソコンをいじり始めた。

「それじゃ、あいつの音楽を聞かなきゃ勝てるんだな？」

クロは腕を解くと、クルルを見た。視線がかち合う。

「ああ。音には、な」

「それだけじゃ足りないよね……」

弥々華は若干不機嫌な声を出した。

「どうすれば勝てるんだろ……正面突破じゃ勝てないし。なんか良いアイデアないかなあ」

「奇襲を掛けた所で、読まれるだろうしな」

弥々華とミーは腕を組み顔を見合わせた。

「そうであります!!」

その時だった。今まで黙っていたケロロは突然大声を張り上げたのは。

「いーいアイデア思いついちゃった!!」

「大丈夫なのかよ……」

テンションが勢い良く上がったケロロにため息を吐き出したクロであつた。

「逃げられる道は見つけました。地図を今、印刷してます。あと他にも捕まってる人がいるみたいです」

僅かに笑ったコタローの顔を、日向姉弟は凝視した。

「すごいわ。初めてから5分も立ってないのに」

「本当にすごいよ!!」

「へへ、ありがとうございます」

誇らしげに笑うコタローに、夏美は軽い苦笑を浮かべた。

「それでコタローくん。他にも捕まった人がいるって本当かい？」

「はい博士。監視カメラの映像を見たんですが、たくさんの人が閉じこめられてたんです。博士みたいな服を着てる人が多かったですけど」

「助けに行きましょう」

間髪入れずに言ったのは鈴木だ。

「そうですね。でも早くした方がいいかも……」

「どうしてですか？」

その時だった。小雪が立ち上がったのは。

「誰か近付いて来てます……1人、2人……たくさんです!!」

その言葉に全員の血の気が引いた。

「とにかく1回逃げましょう!! こっちはです」

そう言ったコタローを先頭に、一行は走り出す。

「ねえ、冬樹……」

「なに？ 姉ちゃん」

「あのコタローって子も剛さんも鈴木さんも……なんであんなに動じないのかしらね」

その言葉に冬樹はなんと言葉を返していいか分からなくなった。

「多分」

走りながらためらいがちに口を開く。

「僕たちより場数を踏んでるのかも」

「かもしれないわね」

夏美は納得したような気分になった。なにせ自分たちがそうなのだから。

「 新たな戦力は確保致しました。現在は別室で待機させています。ナイトメア2体で見張らせていますが、反抗は無いでしょう」
「分かった」

ザールは面倒そうに、食べ物を中心に運んだ。咀嚼し頷く。

皿は彼の両側にうず高く積まれていた。食べ終えた皿をナイトメアが積み、ワゴンにあった別の食べ物を置いた。

「それでザール様」

「なんだ？」

「生き残りはどうなさるのですか？」

ザールのフォークが止まる。

「消す」

ザールは肉に勢い良くフォークを突き刺した。

「たかが無能とガラクタだ。私が出るまでもない。今までならなだが、気に食わないのは抵抗を止めない事だ」

フォークを摘むと、フォークごと口に放り込んだ。ガリガリと硬質の音が辺りに広がる。

「だから、アレは、私が潰す。一縷の望みも残らぬ程に」

ザールは苦虫を噛み潰したような顔で吐き捨てた。

「下げる」

その時だった。

「大変デス！！ ザール様、フィール様！！ 人質が逃げマシタ」
1体のナイトメアが駆け込んで来たのは。フィールは眉間に僅かなしわをよせ、ナイトメアを睨んだ。

「人数は？」

「恐らく、全員」

だんッ！！

前触れの無い音にナイトメアは恐る恐る頭を上げる。そして、また慌てて頭を下げた。

音の主であるザールの顔を見て。

「役立たずめ……」

低い声だった。

まるで地獄の底から響くような。

「ここへ連れてこい」

ナイトメアは頭を垂れたまま、動かない。

刹那、ザールが動いた。

ナイトメアは初め、なにが起きたか理解出来なかった。だが、すぐに得心が行った。

その時、ナイトメアは既に死んでいた。

「私はあまり気が長い方ではないのだ」

ザールは手に持っていた大剣を軽く振る。血が飛び散り、床に付く前に気化して消える。ナイトメアの死体は赤い水に戻り消えた。

「フィール、ナイトメアに命令を出せ。新しい兵にもやらせろ。最後にクラーケンを連れてこい。人質と共に」

「はい。了解致しました」

フィールは頭を下げると、姿を消した。

数秒後、フィールと入れ違いになるようにナイトメアが現れた。

「今度はなんだ？」

明らかに不機嫌なザールにナイトメアは一瞬首をすくめたが、すぐに口を開く。

「降伏スルト……一人来マシタ」

「どういう事だ？」

「門ノ前デ、一人騒イデイル人ガイマス。降伏シニ来テヤッタト叫ンデイマス。イカガ致シマスカ？」

「連れてこい」

ザールは大剣をメアボールに戻しながら、唸った。

「見せ物が多い方が良い」

弥々華は両手を上げたまま、膝を曲げつつ軽く腰を折る。腕に黄色いブレスレットが付いていた。やたらと仰々しい仕草に、ザールの眉間がわずかに潜まる。

「どうせ負けると思ったからね。降参しに来た」

弥々華はへらへらと笑うと、頭を上げた。そう言つて両手を下ろす。
「手ヲ下ロスナ」

ちやきりと大ぶりの刀を突きつけられ、弥々華はまた手を上げた。わずかに首を傾げながら。

「で、判決は？ 海王陛下？」

小馬鹿にしたような口調で弥々華は問いかけた。

「判決は決まっている。それと私はまだ王ではない。じき、王となるがな」

その言葉が引き金となった。

背後のドアが大きな音を立てて開いた。

「連れて参りました」

低い声に、弥々華は息を飲んだ。

「ギロ口……」

無意識に歯を食いしばる。無力感にも似た感覚が、背を這い上がった。

「そこに立たせろ」

弥々華は眼球だけを動かし、声の方をちらりと見た。

「あ……」

思わず大声を上げなくなった。夏美や冬樹、剛やコタローたち、捕まった面々や白衣の一団が壁に手を付け立たされていた。ギロ口やマタタビが彼らを整列させている。

「やつべー、完璧やられてんじゃん」

頭を抱えて叫びたくなる衝動を必死にこらえる。気分は最悪だった。
「閣下」

今度聞こえたのは、柔らかな女声だった。

「クラーケン様を連れて参りました」

「通せ」

弥々華は怪しまれないよう極ゆっくり振り向き、後悔した。
気持ちが悪い。

言いようの無い嫌悪感が胸を満たす。無意識に口を抑えた。
生臭い臭いが辺りを覆う。

なんと表現すればいいのか分からない。ただ肉色をした塊が、じわじわとこちらににじり寄ってきた。

触手はうねり、頭にあたる部分から直に生えているようだった。

柔らかく水つぽい音が、静寂を切り裂く。

姿はまさに圧巻の一言だった。だいたい3〜4メートルくらいはあるだろう。部屋は広く、天井も高いのでつかえはしないが圧迫感はある。

それ、クラーケンはぴたりと止まった。弥々華から数メートルしか離れていない場所だ。

「クラーケン、命令だ。ここにいる『地球人』を食い尽くせ」

弥々華は思わず凍りついた。

「やば……」

思った時にはもう遅い。

足に触手が絡みつき、顎と地面が正面衝突する。

悲鳴が部屋を満たす。

ザールの高笑いが耳障りだ。

悪夢か。

弥々華は奇妙に冷静になりながら、目を閉じた。

右手を天高く伸ばし、念じる。心に望む物を思い描く。

ブレスレットが、黄色い渦巻きが付いたブレスレットが輝いた。

「ミサイル、転送!!」

次の瞬間、爆風が部屋を満たした。

「始まった!!」

ケロロが叫ぶ。研究施設の窓が割れ、爆風が吹き出す。

「弥々華殿、成功したでありますか!!」

「クツク……作戦成功だなあ……ギロロ先輩の武器庫も閉鎖完了だぜえ」

「よし、じゃあ行くか」

立ち上がったクロが肩から掛けているのはロケットランチャーだ。

「剛くん、今助けに行くからね」

ミーが強く手を握りしめる。2人の腕に光るのは渦巻きのブレスレットだ。

「それじゃケロロ小隊臨時救出隊、出撃であります!!」

ケロロが振り上げた手に呼応するように全員が拳を振り上げた。

「クロちゃん、みんな……必ず帰って来てね」

外へ駆け出す背中を見送るナナの言葉を聞いたのは、彼女の後ろにいたクルル1人だった。

To be continued

突拍子も無い。そんな行為にザールはぼんやりとした頭で怒鳴った。

「フィールツ！！ 何が起きた」

「分かりません」

フィールはザールの隣に付くときよろきよと辺りを見回す。だが爆煙が空間を覆い隠し、なにも見えない。

「……恐らく、我々は騙されました。あの下等種の女に」

ザールは口を開けたまま、周りを見回す。

「換気しろ。なにも見えない」

「了解致しました」

フィールは軽く会釈すると、ナイトメアに指示を飛ばす。

「下等種如きの浅知恵に私が引つかかるとは」

その時だった。

「ざまあみる！！ 海底王陛下！！ してやったりだ！！ 悔しかったらやり返してみな！！」

啞然とした。

天井から響いたのはあの下等種、弥々華の笑い声だ。

ザールは呆然と天井を見つめ、椅子に崩れ落ちた。

「閣下？」

ザールはしばらく床を見詰めていたが、不意にのけぞる。

「ふははは！！ ざまあみるだ？」

高笑いの後、無表情に戻る。

「地面の上を這い回る事しかできない下等種族の癖に、何を考えているのだ？ この私に楯突くとは……」

くくと、また笑いだす。

「いい度胸だ。ならば存分にやり返させて貰おう！！ 下等種め」

「おい、何叫んでんだ？ オメー」

煙が晴れたのはその時だった。

ミサイルの着弾と共に、触手が緩む。

弥々華は触手を蹴ると、体を起こし立ち上がった。

「これでいいんだよね。あんなグロいのが出てくるとは思わなかったよ……恨むよ隊長。足ヌルヌルするし。っと、それより……」

弥々華は軽く辺りを見回し耳を澄ませた。

「聞こえないか」

爆音で耳がおかしくなっているのだろう。ともかくと駆け出す。

「いた！」

あまり離れていない場所に、夏美達はいた。

ただあの2人も、武器を構えてそこにいる。

「あちゃ、1人じゃ不利だし。参ったな」

思わず後頭部を掻きながら屈む。

「でも、やるっきゃないか」

奮い立たせ、立ち上がる。その時だった。

「ざまあみろ！！ 海底王陛下！！ してやったりだ！！ 悔しかったらやり返してみな！！」

ギロ口とマタタビが上を警戒したのが一目で分かる。

クルルのせいかな、と出た苦笑と状況を喜ぶ笑みが同時に出た。

「ラッキー！！」

歩術で距離を詰めたのは次の瞬間。弥々華は夏美の手を握り、また距離を置く。この間3秒。

「弥々華さん？ なんでここに！？ ギロ口も変だし、何が起きたの？」

「シッ、時間無いから聞いて。ギロ口は敵。あの猫も。理解した？」
異様な早口に夏美はコクコクと頷いた。理解はちつとも出来ない。

「あとこれ、P.S。これで逃げて。分かった？」
なぜここにあるの？」

その疑問は無意識に飲み込んだ。

「無理はしないで必ず戻って来い。隊長からの伝言ね。じゃ、頑張
って」

そう言つて弥々華は夏美の背中を叩く。

「ボケガエルから？」

「そう」

弥々華は首肯した。

その時だった。

「何をしている？」

低い声に、弥々華の背中が粟だった。

「ギロ口伍長」

普段なら絶対しない呼び方で、弥々華は口を開いた。

「あなたそれでも軍人？」

夏美の気配が背中から消えるのを感じながら弥々華は言い放つ。

「なに敵に従つてるのさ？」

「貴様には関係ない」

「関係無くない！！」

拳を握り締め、叫ぶ。

「あたしもあんたもケロ口小隊隊員だ！！ 他になんの理由がある
のさ！？」

「理解出来んな」

弥々華は、目を見開いたまま硬直した。

「貴様は俺達の過去を知らない。部外者だ」
歯を食いしばったまま、俯く。

「そんなの関係ない！！」

「無い訳が無いだろう。なにも理解出来んくせに」
手の力が抜けた。

上手い言葉が、思いつかない。論破どころか、話も聞いてもらえな

い。

突きつけられた銃口の鈍色に、弥々華は恐怖した。

「バカだ……みんなバカだ。畜生。あたしもあんたも、隊長も。一生恨むぞ。畜生」

「恨むとはなんでありますか？ 弥々華殿」

「で、何叫んでんだ？ オメー」

その言葉に、弥々華は顔を上げた。

煙が晴れたのはその時だった。

「隊長！！ クロ！！」

「お疲れ様であります。弥々華殿」

ケロコの顔を見た弥々華の目が僅かに潤む。

「来たか。ケロコ」

銃口をケロコに合わせたギロコは、瞳孔の開いた目で睨んだ。

「ギロコ……我輩、戦いたくないであります」

「ならば大人しく死ね」

動き出す合図は、銃声だった。

「また来たのですか」

心底うんざりした顔でフィールが呻いた。対峙するのはミィだ。

「言っただろ。君は剛くんの敵だ。剛くんの敵はそのまま僕の敵だ。だから、倒す」

「なるほど。あなたの理屈は理解出来ました。でも私には理解出来ない」

フィールはナイトメアが握っていた刀を取る。クラーケンの触手に巻き込まれたのだろう。赤い液体に沈んでいた刀だ。

「自分の為に戦わぬ者に、私は負けません」

フィールは低く腰だめに刀を構える。

「構えなさい」

ミーも大剣を真っ直ぐに構えた。

刹那、2つの刃がぶつかり合った。

弥々華は空から振ってきた斬撃を回転してかわす。

「なにすんだ？」

「許さんと言っただろう？」

「え？ 聞こえなかったけど」

弥々華はザールの剣をかわす事だけに集中する。

「聞こえなかった？ それは失礼した。ならばもう一度教えてやろう。やられたらやり返す、だ」

「上等」

足元を狙った斬撃をトンボを切ってかわす。地面に着陸すると、その目でザールを睨みつけた。

「黒白風華、発動」

右手に現れた黒白風華を握り締める。左手は刃に添わせ、息を吸い込んだ。

「能力解放！！ 華開け、黒白風華！！」

次の瞬間、風圧が部屋を満たした。

「なんだ？」

ザールは思わず手で目を覆う。

風が晴れた時、そこにいたのは先程までの弥々華では無かった。背中から生えた黒白の翼。携えるは上下2つの刃が付いた大鎌。天使を模した姿の弥々華がそこにいた。

あまりの変容にザールは思い切り目を剥く。

「どこまで足掻けば気が済む……」

「さあ」

弥々華は笑う。

「行けるとこまでかな？」

不敵な笑みにザールは苛立ちを隠せなかった。

忘れた事なんて、一度も無かった。

兄貴分が死にかけ、理性を失った自分を止めたマタタビ。彼の目を挟ったあの感覚を、忘れた事なんて一度も無かった。

「なんでこんな事になっちまったんだろうな……」

クロは小さく吐き出しながら、ガトリングを打ち続けた。

狙うのは基本、足元だ。

マタタビは生身だ。まだ死んで欲しくは無い。

ずっと後悔していた。疫病神だと、自分を責めた事も何回とあった。許してはもらえない。

それは理解していた。

だけど、これは違うんじゃないのだろうか？

マタタビは、無表情で襲いかかってくる。

何も言わない。

ただ、黙ったまま、向かってくる。

マタタビが振り回すチェーンソーをかわす。

いつもならある言葉が、今は無い。

クロは高く飛ぶ。

「いい加減、目を醒ましやがれ！！ マタタビ」

その言葉は、半ばやけくそだった。

お腹から出した大剣を振り上げチェーンソーと噛み合わせる。今、

クロに打てる手はそれだけだった。

「タママインパクト!!」

タママの光線が、クラーケンに直撃する。クラーケンの動きは鈍い。直撃も簡単だった。

「零・次元斬!!」

そこへ飛び込んだのはドロロだ。短刀が、クラーケンの頭部を切り刻む。

ドロロは近くに着地すると、背後をちらりと見た。

クラーケンは確かに頭部をぐちゃりと潰され、そこにいた。

だが、息絶えてはいない。

ひくりと触手が動く。

次の瞬間だった。

焼け焦げた頭部が、切り刻まれ血を噴き出していた頭部が動き出す。ゆっくりと頭を上げたクラーケンは鈍い光の目で2人を睥睨した。切り刻まれた場所には新たな筋肉が盛り上がり、焼け焦げた部分は新たな皮が張る。

早回しのような映像に、ドロロは呻いた。

「面妖な……物の怪の類でござるか？」

ドロロは短刀を構え直し、油断ならぬ敵を睨みつけた。

T o b e c o n t i n u e d

File 13 過去からの咆哮（前書き）

始まる前に注意書きです。

この章では『原作には登場しない、作者の考えたケロロとギロロとドロロの過去』を書いています。いわゆる捏造設定です。

原作では存在しないシーンなのでご了承ください。
それでは本編どうぞ。

File 13 過去からの咆哮

ケロロはギロロの腕を押さえつけていた。

「あの時と逆でありますな」

ケロロは視線の先のサバイバルナイフを見据え、ため息を吐き出す。

「ギロロ、我輩未だに後悔する事があるのであります。なんでもの時止まれなかったんだろって」

ケロロは自嘲気味に笑う。

「ギロロ、本当に申し訳ないであります」

ケロロはそう言って、手を離れた。

「逃げるケロロ!! 君を殺しに来る!!」

そう言って、先日、やっと一緒に軍人になった同期の男は死んだ。ケロロはぼんやりと男の死体を見ていた。血がどくどくと溢れて、床が真っ赤になっていた。

「……クローン」

余り働かなくなった頭が唯一紡いだ言葉がそれだった。

「我輩がやった……」

事故で目覚めてしまったクローンの暴走は既に聞いていた。でもこんな事予想外だった。

「許せない」

気が付くとケロロの足は駆けだしていた。風のように、一切の無駄を感じさせない動きで。

ケロロは大量の水槽が並ぶ部屋にたどり着いた。水槽の中は濃い緑で満たされ、僅かに中身が見え隠れしている。

全てが生物のホルマリン漬けである事にケロロは気付く余裕が無かった。

「クローン」

「来ると思ってたでありますよ。我輩」

ケロロの目の前でニコニコと笑うのは幼い頃のケロロと生き写しのケロン人だった。その手には小さな刃物、多分メスが握られていて体は血まみれだった。

「我輩、オリジナルになりたいであります。お前の大切な『モノ』が欲しいんですあります」

クローンケロロはあくまで笑顔だった。

「変われよ、だから」

「嫌であります」

「それは残念」

クローンケロロが飛びかかったのは次の瞬間だった。

「……ケロロ」

「ケロロ君」

ギロロとゼロロが現れたのはそれから数分後の事だった。2人の目の前でケロロとクローンは壮絶とも言える殺し合いをしていた。ケロロはサバイバルナイフを握り、返り血か相手の血が分らない程の血をまっていた。

「ゼロロ、お前はクローンを止めろ」

ギロロは無表情でゼロロに言った。

「俺はあの馬鹿をなんとかする」

作戦はこれ以上ないくらいシンプルだった。

クローンはすぐに止まった。ゼロ口は新米とは言えアサシンだ。生け捕るのは難しい事では無かった。

手間取らなかつたと言えどそれは真つ赤な嘘になるが。

問題はゼロ口の方だった。

錯乱していた、ゼロ口は。

サバイバルナイフを握り締め、自分の模造品を壊そうと必死だった。ゼロ口も必死でゼロ口を抑える。

「離せ」

ゼロ口の顔に深い影が差しているのを見て、ゼロ口は無意識にたじろいだ。

『素質』が表に出てきたのだ。

「離せ、ゼロ口新兵」

ゼロ口が握っていたサバイバルナイフがゼロ口に振り下ろされた。

ゼロ口の顔を両断するように。

ゼロ口は悲鳴を上げかけ、止まった。大きく震える息を吐き出す。

「『自分』を殺そうとするな。馬鹿者」

いつもの調子で、ゼロ口ははつきりと言った。ゼロ口が固まる。黒い虚空の目を見開いたまま。

「は……？」

「そんな仕事俺たちが引き受ける。だからお前は見るな。いつものお前である。俺たちはお前を守る。何があっても。だから頼れ」

「ゼロ口……」

影がゆつくりと引いていく。ゼロ口は呻いた。ナイフが床に落ちる。

「我輩……何を？」

ゼロ口は恐る恐るゼロ口の顔に触れた。血が止まらない。

「……我輩……我輩……」

「大丈夫だ」

ゼロ口はゼロ口の腕の中、涙を流した。

ゼロ口小隊結成から数年前の出来事だった。

「『倒すことを考えるな』」

弥々華は小さな声で吐き出す。と同時に足を浮かせ、体を真後ろに倒した。

1つにまとめた鎌でつま先を受け止めた。体は吹き飛ぶが、致命傷にはならない。壁に当たる寸前、宙返りをして、壁に足を着けた。

「『時間稼ぎだ。2人が戻るまでの』」

頭を冷静に保ち、かわす事だけを考えて。紙一重とも言える距離でザールの剣が振り下ろされる。回避。ギリギリの距離だ。

「どうした？」

ザールの声が耳に突き刺さった。弥々華は地面に手を付くと、低い姿勢で着地する。

「貴様の足掻きはこの程度か？」

「さあね」

苛立った口調で返すと、弥々華は僅かに口角を上げた。

「悪いね、クルル。時間稼ぎは向いてないわ！」

やけくそぎみに呟くなり、足を踏み出す。先ほど復唱していたクルルの作戦はあえて忘れた。

「転送！！」

鳴らす指先。

転送したのは自動追尾の小型ミサイル。

ザールの周囲が、煙で覆い尽くされた。ゆるりと動く影が鮮明に見える。

「いい加減倒れてくれよ……」

さらに大鎌を持ち上げ、振る。

「風華招来ッ！！」

衝撃波が煙を裂く。

その瞬間だった。

「　　がッ？」

吹き飛んだ体は、地面に打ち付けられてバウンドする。転がったままの格好で、弥々華は顔を上げた。

「なん……」

煙が晴れた。

弥々華は目を見開いたまま、悲鳴を押し殺す。半身に負った刀傷が、音もなく塞がっていく。焼け焦げた部分もほぼ治っていた。

「自己再生……？」

ばきばきと関節を鳴らすザールに弥々華は冷や汗を感じた。実際見るとグロテスク極まりない。弥々華は吐き気を抑えるため唾を飲み込む。

「貴様は許さない」

ザールは喉を鳴らし、静かに笑う。

「死ね」

その手にはメアボール。その手がぎりりと音を立てる。メアボールにひびが入ったのは、その時だった。

ナイフを取り落とす訳でも、突きつける訳でも無い。ただギロ口はそのままの姿勢で硬直していた。灰色に染め変わっていた光彩が漆黒に戻っていると言うのが、先ほどの唯一の違いだ。
ギロ口は軽く口を開けていたがすぐに閉じる。

「……なんだ？」

奇妙な感覚だった。

頭の奥で響いていた甲高い音が消えたような奇妙な感覚。

「なにが起きた？」

「ギロロ？」

「……ケロロか？ 何が起きている？ ここはどこだ？」

ナイフを戻したギロロに、ケロロは潤んだ目で抱きついた。

「ギロロ……目を覚ましたでありますな！！」

「……はあ？」

いまだ理解が追いつかないギロロは首を傾げたまま、突っ立たざるを得なかった。

「う……ぐ……」

「あばよ、キッド」

言葉を取り戻したマタタビが、不敵に笑う。ブーメランが首を締め上げた。

地面に釘付けにされた体は完全に動かせない。

首の関節が、嫌な音を立てていた。自分はサイボーグだから死ぬことはないが、首がもげるのは洒落にならない。

「こ……のやろおッ！！」

それを踏まえたとしても自棄とも言える判断だった。嫌な音を立てる首。

それを無視して体をむちゃくちゃに起こす。

目を見開いたマタタビの力が驚きで僅かに緩んだ、時だった。

「目エ覚ましやがれッ！！」

鈍い音と共に、マタタビは倒れた。

クロの額に、鈍痛が広がる。

捨て身の頭突きは成功した。

マタタビはふらふらと離れると、倒れた。頭の中から音が消えたのは、その時だった。

びっくりと、フィールは体を揺らす。その隙をついたミーが、大剣を首筋に当てた。

フィールは視線をザールからミーに移した。

「最悪ですね。洗脳は解けましたし、閣下はお怒りになられている」
フィールの目は見開いたまま、その顔はどこか恐怖に揺れていた。

「大変ですよ。逃げないと、みんな死にます」

「何を言ってるんだ？」

フィールはミーを見たまま、静かに口を開いた。

「閣下がメアボールを壊したのです。閣下は全てを壊すつもりですよです。だからみんな死にますよ……私も含めて」

「それ、どういう事？」

「地球はきつと、滅びるんですよ」

乾いた笑みに、ミーの背中が強張った。

「地球が、滅びるだって!？」

頬を熱波が打つ。

弥々華は目を見開いたまま、ザールを見据えていた。

「ふふ……ぐ……あゝあゝ……」

ザールは体を仰け反らせたまま、奇声を上げていた。メアボールに食い込んだ指先が、僅かに血を流す。

「あゝガアッ!！」

メアボールが砕けた瞬間、ザールの体は瞬間的に痙攣した。弥々華は顔をひきつらせる。ザールは笑っていた。

「『メアボール侵略形態始動せよ』」

吐き出された声は、信じられないほどにクリアだった。

その時だった。

ザールの体は光に包まれた。

「何が起きてるの？」

弥々華は静かに呻く。何も理解出来なかった。ただそこにあるのは恐怖のみ。弥々華は呆然とザールのいた場所で膨れ上がる光を見据えていた。

T o b e c o n t i n u e d

File 14 怪物は何を望む？

王宮より出て行け。全てを壊しておいて何が王だ、何が侵略だ。この恥曝^{せきばく}しめ。国民はそんなこと望んでいない。出て行け、裏切り者。貴様の王位は剥奪する」

そう言った男も

「化け物！！ お前なんかはこの世界は渡せない……俺達の世界を！！」

そう叫んだ男も大嫌いだった。どちらも私を否定した。なにも知らないで。

自分を世界から追い出した。

ザールの脳裏に過ぎるのは、とても冷たい否定の視線。

幼い頃から共にいた世話役も、自らの一部を分け与えた大蛸も、自分で生み出した部下にも、心は決して許せなかった。

ザールはいつも、孤独^{ひとづ}だった。

「うぁ……」

孤独を嫌がる年頃ではない。

「あぐ……」

でも、全てが気に入くわない。

「くは……」

腑抜けた王室も、自分をこの地に縛り付けた男も、緑のケロン人も、黒い機械猫も、同じ目をした人間も。

「がああああ！！」

ザールの咆哮は全てを揺るがした。

膨れ上がる光に、フィールは呆然とした表情を浮かべながら笑っていた。

「みんな……死にますよ。あなたも私も」

ミーの大剣を首に突きつけられた、フィールは笑い続けた。

「あなた、ここが海に沈んだ理由が分かりますか？」

フィールはミーの大剣に首を預けるとくるりと回る。

「えー？」

ミーが大剣を振り回した時には、既にフィールは剣の上に立っていた。

「閣下が沈めたんですよ。大地を海に」

フィールは地面に下りると、膨れ上がる光を見つめた。ミーは大剣を構えたまま、フィールを呆然と見つめていた。

「あの時は、沈みきる前に私達は封印された。そして今に至ります」
狂ったような笑みは消え、フィールの顔に悲しみが浮かぶ。

「クラーケン様を配下に付けた後の話です。私達は海の支配者だった。海底の王国で私達は陸を沈める計画を立てていた。でも、それは出来なかった」

フィールはため息を吐き出した。

「私達は負けたのです。地面の上でしか活動できない下等種に」

ミーは何も言えず、その話に耳を傾けるしか無かった。

「封印の直前、閣下は侵略形態の姿を取りました。そしてこの一帯を海に沈めたんです」

フィールは首を振った。

「この一帯を調査させた所、その辺りの話は原住民によって絵として記録されていたみたいですけどね。あれは真実です」

フィールは柔らかに笑う。

「あなた方に彼らと同等の行為が出来ますか？ ガラクタの出来損ないと、若輩者に」

「出来るさー！」

小馬鹿にしたような言い草にミーが身を乗り出す。

「僕だけじゃない、クロもいる。僕らは勝つよ」

「それは心強い」

フィールは相変わらず小馬鹿にしたような声音だ。

「ならば早く、あの女に加勢する事をお勧めします。じゃないとあれ、死にますよ」

その時、ザールの咆哮が轟いた。フィールが笑みを貼り付けたまま姿を消すのはそれとほぼ同時だった。

気が付くと壁に背中がめり込んでいた。ぎりぎり押し付けられる感覚に、弥々華の胃液がせり上がる。

指先も動かない。もちろん足も。悲鳴すら上げる隙は無かった。

「く……？」

目の前には青みの勝った黒い艶のある塊があった。蛇の体のようなそれは冷たい。

目が回ってきた。俗に言う酸欠に、口をぱくぱくと動かす。顔が熱くなる。視界は薄暗い膜に覆われる。

弥々華の意識が闇に沈む、その瞬間だった。

「弥々華ッ！！」

散った赤。

弥々華の体が崩れ落ちる。

塊は血を撒き散らしながら、スルスルと引いた。

弥々華は地面に跪くと、咳き込む。

「ミー君？」

「大丈夫？」

「流石に死ぬかと思った……」

弥々華はしばらく咳き込みながらやっと言葉を吐き出す。

「で、何が起きて……」

その言葉は途中で喉の奥に飲み込まれた。

「何……何アレ？」

「ザールのなれの果てらしいよ？」

「なれの果て……」

そこにいたのは、まさに深海の悪魔だった。

がつしりとした上半身からは隆とした腕が生えていた。右腕にはメアボールが溶け込んでいた。蛇を思わせる尾と背中には悪魔を思わせる蝙蝠の羽根。

その姿はまさに

「リヴァイアサン……」

「なにそれ？」

「昔の伝説の怪物だよ。腕は生えて無かったような気がするけど、実在するとはね」

弥々華は口の端を拭きながら呻いた。

「よく知ってるね……」

「子供の頃に読んだんだ。とにかく、リヴァイアサンとクラークンとかどこのファンタジーだよ。クソ」

弥々華は苦笑する。勝てる訳がないと、頭のどこかが叫んでいた。

「そこ、右に曲がれ」

クルルは夏美達一行に指示を出しながら、ハッキングを行っていた。あるパソコンを覗いた時、妙な胸騒ぎが走ったのだ。

「そこ左。次の角は曲がるな。敵がいるぜ。その向こうの階段を使え」

【分かったわ】

「ああ」

クルルは小さく呟いた。

その手は止まることを知らない。

「見つけた……」

それは一番深い所に沈み嚴重に鍵を掛けられたデータだった。クルルはなれた手つきで鍵を解いていく。

数式が並び鍵が開く。

「クツ!？」

「どうしたの？ クルルさん」

クルルが上げた奇声にナナが駆け寄る。

クルルは呆然とした表情でモニターを見つめていた。

「なんでこんなモンがここにあるんだよ……」

レンズの中の表情は読めない。ナナは視線をゆっくりとモニターに移すと、その文字を読み上げた。

「『k66クローンに関する研究と成果』……なにこれ？」

クルルは笑ったまま、動かない。

「ナナ」

その声は怖いほどに真剣だった。

「誰にも言つなよ。言ったらお前エの記憶、消すぜ」

ナナはとつさに頭を抑えた。

「い……言わない!! アタイ誰にも言わない」

クルルは返事をする事もなくキーボードを打っていく。モニターにはdelete《消去》の文字が残っていた。

「なんでこんなモンがここにあるんだろうな」

「……誰かがあげたんじゃないの。このパソコンを使ってる人にクルルの方がぴくりと跳ね上がる。」

「かもな」

クルルは個人データと履歴を漁り、にまりと笑った。

「ビンゴだ」

クルルが呼び出したのは、名前と1つの履歴。呼び出された名前は

『天童勇』。

「あー!!」

モニターを覗いていたナナがおかしな声を上げた。

「うるせえな。で、どうしたんだ？」

「アタイ、この人知ってる。コタローちゃんを誘拐したり、マタタビさんを操って、クロちゃん達を倒そうとした人よ」

「そうか」

クルルは相変わらずの表情で、パソコンをいじくり続けた。

「ZAL細胞……ZAL……ザールの細胞を組み込んだ生物を造ったのか？ だが何のために」

クルルはひたすらデータの世界に埋没していく。

「実験結果は送られてる。だがこのアドレスはなんだ。無茶苦茶じやねえか」

クルルの独り言が加速する。

「天童は独力でザールを見つけた訳じゃねえ。それは分かった。だがなんでケロンの実験結果がここにある。誰が送った？ なぜバレていない？ 地球人じゃねえなら一体誰が……」

謎は深い。ぐちゃぐちゃになりかける頭をクルルは振る。

考えるのは後回しだ。

今は人質を外に出さなければ。

鬼式を纏ったドロ口は、タママが連射するインパクトの合間を抜けながら様子を窺っていた。

クラーケンの触手がタママに向かって放たれた。8本の内2本が。

今だ!!

ドロロは触手の上を2歩で駆け上がると短刀を構えた。

「零・次元斬」

冷たい殺意が辺りを満たす。

次元を切り裂き、クラーケンを狭間に落とす。一切の慈悲もなく破壊しようとした。だが、クラーケンは奇っ怪な鳴き声を上げると触手で少し離れた壁に取り付いた。次元が裂けるほんの一瞬、クラーケンはその場から逃げ出した。

「面妖な」

その言葉しか出ない。

クラーケンから離れた場所で次元が裂ける。

「ドロロ先輩……」

タママの心配そうな声がドロロの耳に響いた。

「心配ないでござるよ」

「なにが心配ないのだ」

その声が響いた瞬間、クラーケンの片割れが床に落ちた。

頭が横真つ二つに割れたクラーケン本体は頭を泡立たせながら必死で再生を試みている。

風切り音が止まった。

「あちらは人手が足りているようなのでな。助太刀させてもらっ」

その言葉に2人はゆっくりと振り返る。

「君は、マタビ殿？」

赤マントの虎猫はブーメランを構え、ただ不敵に笑っていた。

T o b e c o n t i n u e d

F i l e 1 5 未来への咆哮（前書き）

とりあえず連載再開です。

投稿自粛の経緯に関しては、活動報告をご覧ください。

File 15 未来への咆哮

「許さない……」

その言葉と同時に放たれた光線が地を穿つ。辛うじて紙一重でかわした一行はとつさに物陰に隠れ、顔を見合わせた。

「なんでこんな事に」

小さく呻いた弥々華をクロは睨み付けた。

「んな事考えてどうにかなる場合じゃねーだろ」

「そうでありますよ」

クロ口にも睨まれ、ギロ口からも無言の圧力を受けた弥々華はぴつと舌先を出した。

「悪い」

【らしくねえな、弥々華】

「ひゃっ!？」

弥々華は思わず飛び上がり、周りを見回す。

「クルル曹長? なんでありますか」

クロ口とギロ口は耳に手を当てて、クロとミーは黄色いブレスレットを見た。弥々華もブレスレットを見る。武器の転送機能だけで無く通信機能も付けたらしい。全く優秀な男だ。

【オッサンも戻ったみてえだな。よし、手短に話す。人質は全員そこから出た。全員無事だ】

その言葉に全員が息をついた。

「良かった……無事で」

【安心するのはまだ早いぜえ? ミー。ザールが暴走してる。見たな?】

通信の合間にわずかなカタカタと言う音が響く。

「見たが?」

ギロ口が素っ気なく答えた。

【暴走の理由はメアボールの機能だ。あれを壊せば、元に戻る】

「よっしゃ」

今にも飛び出そうとしたクロの尻尾を弥々華は慌てて抑えた。通信は続く。

【それにメアボールと感情のシンクロが起きてる。つまりあいつの理性のタガがぶっ壊れたような状況にあるってこった】

「ぶちギレてるって事？」

【若干違うがほぼ正解。これ以上ほっとくと大爆発起こすかもな】

「……大爆発！？」「……」

素っ頓狂な声がハモる。

【例えだがな。体が中身のエネルギーに耐えかねてぶっ壊れる。そうになったらここもただじゃすまねえ。分かるだろ？】

「ああ。僕たち、死ぬかもしれないんだろ」

【かも、じゃねえ。死ぬぜ、確実に】

「だったらやるしかねえだろ」

クロはあっさりした口調で言い放った。

【そう言うこと。じゃ切るぜ】

その言葉を最後に、通信はふつりと切れた。弥々華はクロの尻尾から手を離す。

その時だった。

「面倒だ！！　まとめて葬ってやる！！」

ザールの苛立たしげな声が響いた。その声と放たれた一筋の光線が、地面を裂く。

「飛べ！！」

弥々華を除いた全員が背中に呼び出した飛行ユニットで空に舞い上がる。弥々華も数秒遅れで空に飛んだ。隠れていた場所が瓦礫で埋まる。

それを弥々華は呆然とした頭で見ていた。

「大変だ……」

「政府に非常連絡を――」

ここは日本気象庁。今、そこは蜂の巣をつついたような騒ぎに覆われていた。

「なんなんですか!？」

「海面が上がってきたぞ――!」

「……日本が……沈む?」

「アメリカからの速報です――! 世界中に甚大な被害が出るような海面上昇です――!」

「情報をマスコミに流すな――! パニックになるぞ!」

今までに無い凄まじい騒ぎの中、1人の男は蒼白な顔をしていた。男は騒ぎから離れると椅子に崩れ落ちる。

「……世界が滅びるのか?」

男の呟きは誰にも聞こえてはいない。

「なんだ?」

クルルがその男に気づいたのは偶然に近かった。流れる映像は都市内の街角を映し出した物。そこに画面を横切った男がいた。

端正だが冷たい顔をした、スーツの男。クルルには見覚えがある男だった。

「……まさか」

クルルはメガネのブリッジを軽く抑えた。自分はこの男を知っている。

「ソルナか?」

自分達を案内したガイドが何故捕まらなかった？

クルルの脳が苛立ちと共に回転を始める。ソルナはなぜここにいるのか。理由は

「なるほど」

ほんの少しだけ袖から覗く血塗られた白銀の刃がそれを物語っていた。

「待てよ」

武器が袖から覗いている《……………》。普通ならありえない。ナイフなら握りが、刀や剣ならあるはずの柄が無い。仕込みナイフにしても、異質。手があるべき場所に刃があるのだから。クルルの背中が総毛立つ。

「まさか、Resistanceか？」

少し前の事件が頭に蘇る。Resistanceの中には体を武器に変える人間がいた。

「クツ…………」

思考が繋がる。

「クルルさん、どうしたの？」

隣にいたナナが顔を出す。

「ナナ、それ見てろ」

クルルが指さしたのは自分のパソコン。

「え、クルルさんどっか行っちゃうの？」

「ああ」

クルルは背中に飛行ユニットを呼び出すと、静かに言い放った。

「クルル、出る」

走った光に、地面が揺れる。

「タマツ!？」

光線の余波にタママは思わず姿勢を崩し、地面に膝を着いた。マタタビも珍しく4本足で立つ。ともに立っているのはドロ口ただ1人だ。ドロ口は注意深く辺りを見回し、背筋が凍った。

「あれは……まずい!!」

叫び声は無意識に出た。

ぐらりと揺れていたのは巨大なシャンデリア。金属が揺れる音が怪しく響く。揺れははまだ、続いていた。

「タママ君!! マタタビ殿!!」

そんな物が姿勢を崩した2人の頭上で揺れていた。

その時、悲惨な音が響いた。シャンデリアが傾ぐ。

ドロ口は柄にも無く、悪態を吐き出しそうになった。

その時だった。

マタタビの口角が、つり上がった。

「いい加減にしろよ!!」

許さない。そう呻き続けるザールに怒鳴ったのは、ミーだった。

「君に何があつたか分からないけど、何が許さないだ? ちゃんと話さないと分からないじゃないか!!」

「やかましい!!」

ザールの一喝が、空気を震わせた。

「貴様らに何が分かる? 腑抜け王族に全てを奪われた挙げ句この地に縛り付けられたこの苦しみが!？」

鬱積した物が溢れた。

「安穩とした暗闇に包まれるあの不快さが分かるか? 何も起こらない暗闇の辛さが分かるか? 望まない平穩の苦しみが分かるか?

死ねない眠りの痛みが？」

「だったらなんでありますか！！」

怒鳴り返したのケロロだった。

「我輩には、分かんないであります！！ 我輩だってケロン軍に仲間も記憶も全部奪われた事があります。細胞だって取られた。クローンで我輩は死ねなくなった。我輩はケロン軍を恨んだ。でも、だからって全部壊してやろうなんて、思わなかった！」
ひゅーと喉が鳴った。

「それにお前は我輩のモノに手を出した。だから、ケロン軍人魂に掛けて我輩はお前を倒す、であります」

ビシッと音を立て、ケロロはザールを指差した。それを見たギロロがふっと笑う。

「ケロロ」

「なかなかイイ事いうじゃねーか」

クロの不敵な笑み。弥々華もつられて、くすりと笑い口笛を吹いた。
「隊長かつこいい」

「ゲロゲロリ。それじゃ覚悟するでありますよ、ザール！！」

「何がケロン軍人魂だ！！ くだらぬ、結局貴様らも私同様、憎悪に満ちた復讐心の持ち主達ではないか。いいだろうその誇り、何もかも叩き潰してやる！！」

戦いの鐘が鳴り響いた。

「よお」

その言葉に、男は立ち止まった。

「聞こえてるだろ？ ネイト ソルナ。俺の声が」

「誰ですか？」

その言葉に抑揚は無い。感情の無い声のイントネーションに違和感はない。

「訛りがねえな。何に焦ってるんだ？」

「なんの事です？」

「芝居のメッキが剥げてんだよ。ソルナ」

その言葉と共に、クルルは物陰から姿を表した。ソルナは驚いたように目を見開く。

「ククツ、お前何者だ？ 今更タダのガイド、とか言わねえよなあ
クルルの表情は変わらない。

「お前、Resistanceだろ？」

ククツと笑ったクルルに、ソルナは静かな笑みを浮かべた。

「やはり、目立ってしまったようだね。完璧に複写出来たと思った
んだけど」

その言葉に自嘲が浮かぶ。

「あなたに敬意を評すよ。クルル曹長。私は確かにResistance
です」

その時、一陣の風が吹いた。

To be continued

「うおおおおー!!」

気合いが、空を切り裂く。解除された武器庫から呼び出されたロケットランチャーを、ギロロはぶつ放す。

折り紙付きの威力は消える事無くザールに収束。

「甘い!!」

耳障りな音。爆音と共に破片が食い込むも表情1つ変えなかった。ザールは右腕を振り上げる。メアボールを変化させた暗い紫の腕はどこか有機的な形相を晒していた。

「消え失せろ」

真横に放つ光線。ギロロは緊急回避、変わりに割り入るのは黒白の影。

「黒白繚乱×2!」

回転を掛けクロスして放たれた衝撃波が、ザールの生み出すその軌道を変える。

壁に向かう光線をかいくぐるように、弥々華は飛んだ。

「風華招来!!」

正面切った一撃。ザールは当然のごとく、腕でそれを受ける。弥々華はさらに、速度を上げた。

肥大した頭部の真横を抜ける。羽虫のような弥々華に、ザールはとつさに左腕を振った。

「げっ……風華招来!!」

弥々華は急回転すると、一閃。ザールの手のひらが、ぱっくりと裂けた。

「ぐ……」

巨大過ぎる血飛沫が散る。弥々華は全身を返り血に染めたまま、跳びさる。

血染めの弥々華と入れ替わったのはクロとミー。

「行くぞ、ミー君」

「おうッ！」

2人は飛び上がり、手のひらを合わせた。

「合体！！」

綺麗に重なる声。組み変わるのは機械と生身が混じり合う体。ミーの頭部を体に見立てた合体はある意味無理やりではあるが。

2人は地面に着地すると、ザールを睨みつけた。

「覚悟しやがれ！！」

「覚悟しろ！！」

2人の声は重なるままにザールの鼓膜を揺らした。

クラークのそりと頭を上げる。マタタビはタママの手を引くと走り出した。

「タマッ！？」

揺れは収まった。タママはふらつきながらも、ついて走る。

伸ばされた触手。体が付いてくるのを見て、マタタビは叫んだ。

「落とせ！！」

ドロロがその言葉を理解するまでに、時間は掛からなかった。

「承知！」

ドロロは飛び上がる。

目指すはシャンデリアを支える鎖。

「ドロロ忍法 流星切り！」

ドロロが放ったのは、三日月の斬撃を飛ばす技。それはキレイな軌跡を描き鎖に食い込む。

シャンデリアが傾ぐ。

マタタビも自らのブーメランを放つと、鎖は音を立て切れた。

シャンデリアが真つ逆様に落ちる。クラーケンは、少し離れた場所を這いずっていた。

「タママインパクト!!」

黄色い光線が、シャンデリアの軌道を変える。

クラーケンは上を見た。

白く輝く巨大なシャンデリアが落ちる。皮膚にめり込んだのは鋭利なガラスと金属。

耳障りな音と悲鳴が混じり合う不協和音に、タママは耳を塞ぎマタタビは眉根を寄せた。

ドロロは静かに短刀に手をかけ続けた。

血が溢れる。

シャンデリアは赤黒く染まり、悲鳴は止んだ。

巨大な海の怪物が沈む。

それを3人は何も言わず、見つめていた。

「やはりあなたは侮れませんね」

ふふと、ソルナは笑んだ。柔和なそれは、この緊迫した空気には相応しくない。

「くくつ、そりやどうも」

クルルはシニカルに笑うと、後ろ手に小型のブラスターを呼び出した。

「で、Resistanceがなんの用だ? こんな所に」

「仕事ですよ。大切な、ね」

クルルの眉が寄せられる。

「ところであなた、何してるんですか?」

構えたのは、ソルナ。

その時、一筋の銃声が鳴り響いた。

部屋に響くのは幾つもの銃声。ギロロ、合体したクロとミーが放つ弾丸が、ザールの皮膚を浅くえぐる。

血が噴き出す間もなく塞がる傷に、舌打ちしたのは一体誰か。

弥々華は黒白風華を下ろし、地面からただただその様子を眺めていた。

「ガア!?!」

悲鳴が響く。どちらが放ったかも弾丸がザールの額を貫いた。

「今だ!?!」

弥々華は叫ぶ。

その言葉に応じるように、ギロロは引いた。ザールの額の傷が塞がっていく。

ミーは合体を解除、着地。

クロは逆に大剣を構え、突っ込んだ。

「クロ殿!」

ケロロはクロに追いつくと、大剣を掴む。

1つの大剣を掴んだ2人は、それを勢い良く振り上げた。

ザールの傷は完璧に塞がった。3対の視線が空中でかち合う。

ザールが動いた、瞬間だった。

「風獄・螺旋華!?!」

弥々華の声が高らかに響く。

闇と光を凝縮した帯が、ザールの全てを束縛していく。

「行ッけエエー!?!?!」

力を込めた言葉に押し出されるように舞い上がる2つの影。

ケロロとクロは1つの大剣を、同時に振り上げた。

刹那、ザールを捕らえていた帯が外れた。
弥々華の口角が上がる。

「うおおおおお！！！！」

一閃。

ザールがメアボールの腕で、大剣を受け止めた。

ギリリと金属音。力が拮抗する。

そこに今度は銃弾が殺到した。

拮抗が崩れる。

何かが碎ける音が響いた。

散らばるのは、濃紫の破片。

打ち碎いたのは、銀の刃。

碎け散った濃紫は、光を放つ。

ザール、ケロロとクロ、そして弥々華はその光に飲み込まれた。

「覗きとは趣味が悪いですね」

緩慢な、だが隙のない動きでソルナは歩く。クルルはその動きから目を離さないよう、用心深くソルナを見据えた。

ソルナは路地に腕を突っ込むと、何かを引きずり出した。

クルルの目は静かに見開かれる。

ひよろりとしたその男は、バタバタした仕草で壁にくっついた。

その顔に刻まれたのは明らかな恐怖。

「何が恐ろしいのですか？ 散々あなたには協力してきたのに……」

「く……来るな、近寄るな！！」

その言葉にソルナは顔をしかめた。

「全く。嫌だ、嫌だ。僕はそんなに化け物ってわけですか？ 天童博士」

「それともなあに？ 私はそんなに嫌われてるのかしら？」

少年の声、ついで美しい女性の声にソルナの声が変わる。

次の瞬間、ソルナの顔が歪んだ。比喻では無く、顔が溶けるような歪み方を見せる。

「俺とした事が……」

「能力が制御出来ないなんて、ね。油断しました」

その顔は、全てはソルナのものでは無くなっていた。

すらりと伸びた肢体を持つ女の体に乗るのは白銀の髪の方。声は少年のそれ。

「お前は……」

クルルの記憶に蘇るのは、秋口のあの事件に現れた能力者。弥々華に姿を変えた人間。

「ミラー」

「ご明察」

またもやソルナ、いやミラーの姿が歪む。現れたのはソルナ。

「Resistance、ミラー・アクティート。それが私の名前」
そう言つてミラーは先ほどとは違う、冷めた笑みを見せた。

口の端から零れる泡に、弥々華は口を抑えた。

これは、水中？

独特の重力を持つ酷く冷たく場所に、弥々華は青ざめる。
だが呼吸は続かない。

「かば……ぼこ……」

弥々華はもがくと、息を吐き出した。

あー、苦し……くない？

息が出来た。水中なのに。

そつと弥々華は目を上げた。

「ここは？」

弥々華には分からない。

それはとても暗い空間だった。

何も見えない。

「もしかしてあたし、死んだ？」

頭の中に響くのは、チーンという不吉な音。

青い顔のまま弥々華は辺りを見回した。その時だった。

「そんな勘弁ってか……お亡くなりとかありえな」

「私はずっとこのままなのか？」

大きく響いた静かな声に、弥々華は振り向いた。その声にはいやと言っただけ聞き覚えがあった。

「……もしかしてザール？」

「私はなにも成せずに終わるのか？」

その時、小さな光が見えた。

弥々華は1人頷くとその光に向かい泳ぎだした。

T o b e c o n t i n u e d

File 17 下等種の意地

光は放たれた。

「閣下!？」

青ざめた顔でフィールは研究施設を見つめる。

「閣下……!!」

フィールは小さく叫ぶと、必死に飛んだ。ただ1人の為に。

「ザール!!」

光はザールが放っていた。水の中ザールは1人うずくまっていた。

「おい……アンタ」

水を含んで重くなった羽を畳んだ弥々華は思わずザールの小さな肩に触れようと手を伸ばした、瞬間だった。

「王宮より出て行け」

突如響いたその声に、弥々華の肩がびくりと震えた。

「な……なに今の!？」

虚空から響いた声に弥々華は身を強ばらす。

「全てを壊しておいて何が王だ、何が侵略だ。この恥曝^{ひび}しめ。国民はそんなこと望んでいない。出て行け、裏切り者。貴様の王位は剥奪する」

「化け物!! お前なんかはこの世界は渡せない……俺達の世界を!!」

「化け物!!」

「裏切り者!!」

「恥曝し」

「出ていけ!!」

「消え失せる」

「死ね!!」

弥々華は四方から響く罵声に、周囲を見回した。

「嫌……だ」

低く響いたその言葉は、はっきりとした拒絶があった。

「ザール？」

「私は貴様らに報復するまで死ぬわけには行かない。やり遂げるまでは、死ぬわけには行かない。地球からも出ては行かない。私は、貴様らに指図されるほど愚かでは無い!!」

ザールは立ち上がると一度にまくしたてる。罵声は止んだ。

弥々華は驚きのあまり、目を見開いたまま静止していた。

「……何を見ている？」

ザールは荒い息を吐きながら、弥々華をぎらりとした目で睨みつけた。

「何故貴様はここにいる？」

「あたしは……」

言葉を濁した刹那だった。

「弥々華殿!!」

その言葉に、弥々華は小さく身を震わせ振り返った。

「隊長……クロ……」

「大丈夫でありますか？」

ケロロへ弥々華は軽く頷いた。

ケロロは弥々華を数秒凝視したが、ザールの方へすぐに向き直った。

「ザール。ここはどこなんですか!？」

ケロロの口調は苛立っていた。

「貴様に教える義理は無い」

小馬鹿にした口調にケロロは毒気を抜かれた顔になる。

「もう、終わらせよう……」

ククとザールは狂気じみた笑みを浮かべた。だがその声には明らか

な疲労が刻まれている。

「なんだと!!」

「待つであります!」

クロが1歩前に踏み出した。今にも飛びかかりそうな体をケロロは制した。

「武器も無いのにどうする気ですか? ザール」

ケロロは真摯な瞳で、ザールを見た。

「武器ならあるとも」

ザールは静かに嘲笑う。次の瞬間、紫の陽光が射した。

「メアボール。刀剣形態・メアソード」

その笑みは深まる。陽光が凝縮。その手に現れた剣に弥々華は舌打ちを漏らした。

「行くぞ」

光が切れる。

「なにが起きた?」

ギロロは目を覆う手を下ろす。

「あれ、クロは?」

ミーは辺りを見回すと、首を傾げた。

「ケロロと弥々華も見当たらん。一体何が起こってるんだ?」

ギロロも呻くと周囲を見回す。

ザールの立っていた床に転がったメアボールが淡い光を放っていた。それに気付くものは、誰もいない。

「わわ……!!」

比較的大振りに振られた剣を、弥々華は一步引いて避ける。さらに右下から切り上げる剣を軽く仰け反ってかわす。

ザールが踏み込んで付いた。

弥々華は低く跳ぶ。

「弥々華殿!!」

弥々華はちらりと視線を動かした。
と同時に側転。

「オラアッ!!」

弥々華の足元をすり抜けたのは小型のミサイル。クロの尻尾から放たれたそれは、ザールにぶつかる。

「風華……」

傾いた弥々華の姿勢が整った。

「招来!!」

衝撃波と同時に駆け抜けたのは、先ほどの大剣を握ったケロロだった。

「Resistance、ミラー アクティート。それが私の名前」

冷め切った笑みで、ミラーはクルルを見た。

「随分と酔狂な名前だぜえ」

クルルはからかいの言葉を投げ少しばかり笑うと、天童に視線を移した。

「ところでお前ら、いつからグルだった？」

「いつから？ だと」

耳障りな笑い声が辺りを揺らす。天童は引きつった顔でクルルを見た。

ミラーの口は止まらない。

「2匹の宇宙人^{エイリアン}を墓穴から掘り起こし、ご丁寧に英訳された宇宙人の研究データと共に送りつけた。後はコイツがポ力をやらかさないように見張った、それをグルと言うのなら最初からだよ」

その声は明らかな嘲笑の色をはらんでいた。

「だが、しかしだ」

金属が鳴る。

「1度も私達は手を組んでいない。ご理解頂けるかな？」

「ああ……」

クルルは心底面倒だと呻き声を上げた。

利用されたのだ。あの科学者は。ソルナとなったミラーに。

「ッ……かは……」

全てを受けきったザールは、静かに息を吐き出した。既に塞がり始めた傷は、鮮血を吐き出した。

ザールは冷めた視線でケロ口を見やる。

「お前達の行動原理は……なんだ？」

ぶつりと音がした。首に食い込んだ刃をザールは握り込む。

「義務感なのか？」

「ケロ……！？」

「それとも……」

「ゲエロオー！！」

ブン、と音を立ててケロ口は吹き飛んだ。無理やり放り投げたせいかザールの手には深い切り傷が入る。

水が血に染まる。

ザールの瞳には鬼気迫る色が浮かんだ。

「ケロン軍人魂とやらか!!」

ザールは勢いを付けると、ケロロに突っ込んだ。刃が立つ。

「危ねエ!!」

クロがお腹のポケットから取り出したガトリングを構えた。だが

間に合わねー!!

ケロロが半ば無意識に目を閉じた時、何かが飛び込んだ。

次の瞬間、赤が散った。

「弥々華殿？」

「隊長……無事？」

弥々華の額から鮮血が垂れ落ちた。閉じた右目の上がざっくりと切れている。

「な……なにやってるんですか!!」

失うのか？ また、仲間を。あの時のように

弥々華は額に手をやった。

「あの時、守れなかったから」

血は止まらない。唇の色が褪せていく。傷は眉間からこめかみにまで達していた。

水に溶ける血液で赤くなった視界で、弥々華は目を開けた。

「だから、心配しないでよね」

弥々華はそう言うと、ケロロの背後にいたザールに視線を移す。

「さて、ザール。あたしはアンタに言いたいことがある」

弥々華はふらと体を動かした。赤い血に赤い瞳。

地獄の堕天使のような容貌で、弥々華は瞳に力を込める。

「人間も軍人魂も両方舐めんな!! 下等種にも意地くらいあんだ
つーの!!」

弥々華は黒白風華を構えると、きつとザールを睨みつけた。

「下等種に意地」

ザールはフンと鼻を鳴らす。

「そんな物あつたのか？」

弥々華の頬に血が上る。睨みつけるような目が苛立ちに見開かれた。

「当たり前だ！！ 見てろ！！」

確証は無い。だがやる自信はあつた。

「風華」

低く構えた黒白風華にこもるのは今まで鬱積してきた怒り。

「招来！！！！」

衝撃波が目指したのはザールではなく遙か上。

水を裂く先、それは

この小さな世界の果て。

「なんだ！？」

ギロクの鋭敏な聴覚は、その不愉快な音を捉えていた。

「これから音がしてる……なんなんだろう？」

ミーはザールのメアボールに駆け寄ると、そつと指差す。

ドロロとタママ、マタビもなんだなんだと駆け寄ってきた。

その時だった。

キイイイイイイ！！

その音は肥大する。

そして次の瞬間、メアボールは大爆発を起こした。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

File 18 ハンマーソングと痛みの塔

世界が壊れたのだ。

弥々華はそれを笑みながら理解した。次の瞬間、見えた光に全員が引き込まれた。

いや、引き出された。

暴力的な水の流れ。

薄紫の世界。

弥々華の記憶はそこで途切れた。

「さあ、無駄話はここまでだよ」

ミラーはゆるりと手を上げると、その手を天童に伸ばす。

クルルはとつさに、後ろ手に持っていたブラスターを構えた。安全装置を素早く外す。

だがミラーは止まらず天童の髪を掴んだ。ひいと悲鳴が上がる。

「この男は始末させて貰います」

クルルは引かない。ブラスターの引き金に手を掛けた。

「その手を放しな。民間人をテロリストに殺らせるわけには行かねえからなあ」

クルルはククと笑い、ブラスターの照準を合わせる。と、同時にヘッドホンに指を這わせた。数秒、静寂が落ちる。

静寂を貫いたのは、どちらの声でも無い。ブラスターの銃声にミラーは瞬間気を取られた。

それを見逃すクルルではない。

「くっ……!!」

ブラスターでミラーの手首を撃ち抜く。

同時に天童に送ったのは自らの電波。いわゆる毒電波により天童は無言で昏倒する。

「さっさと帰りな」

足元を浸食する水を見視し、クルルは冷静に言葉を発した。

「ここももう、長くはねえだろうしな」

ミラーは血を流しながら舌打ちを漏らした。

「クルル曹長。1つ忠告しておく」

空間が開く。

「あまり目立たない事だ。我々は君に目を付けている」

「勝手にしろ」

クルルの返答は速い。

「俺の居場所は、ここだけだ」

ミラーの背に呟いた言葉は誰にも届かず消えた。

不意に肺に酸素が入り込む。と同時に水が喉にせり上がった。

「げげげほっ……うえ……」

弥々華は膝を抱えるように腰を曲げると激しく咽せた。口から薄紫の液体が垂れ落ちる。

「ここはぁ……?」

不鮮明な音声に、ひゅうと喉が鳴った。

「戻って……来たのか……?」

周りには呆然とした顔のギロ口達が出た。ケロ口も、クロも啞然とした顔で座っている。それを確認した瞬間だった。

「なんて事をした!？」

弥々華はゆつくりと視線を移す。

「貴様、何をしたあッ!？」

ザールの手の中には、内側から破裂したようなメアボールがあった。内側の配線が微妙に外に飛び出し、再起不能なレベルに壊れている。あれをやったのは自分なのだろうと、弥々華は悟る。あの中に自分達は閉じこめられていたのだろうと。

一方、ザールは血走った目で周囲を睥睨する。その目が弥々華を捉えた時、ザールは駆けた。

近寄ってくるザール。

弥々華はそれをただ見ている事しか出来ずにいた。

その時だった。

「大概にしゃがれ!!」

飛び出した黒い影は確かにザールを捉えた。鈍い鈍い、音がした。

「痛っ……」

クロの体は鉄の塊。そんなもので殴られてはたまったものではない。

ザールはもんどりうって倒れる。

「何をす」

その言葉は途中で遮られた。クロはザールを踏むと、じろりと睨む。

「いい加減にしろ。納得しろとは言わねーからまず落ち着け」

ザールは無言だった。ただカッと見開いた目を緩め、体の力を抜く。

「……どうしろっていうんだ」

ザールは呻く。

「家族に追い出された。この星では殺されかけた。部下はいない。

武器も無い。私は、どこに行けばいい? たった1人で」

ザールの声が僅かにかすれた。

クロはため息を吐き出し、足をよけた。

「どこでもいいんじゃないのか? んなもん。それによ、オメーが復讐する物なんてもうどこにもねえんだ」

「……、どういう事だ?」

ザールの動きが完全に止まった。

「マロン星の王政は、無くなったんであります。今は民主制に切り替わった。もうずっと昔に」

ザールの表情が変わる。呆然と、自分を失ったような無表情へと。

「そんな事が……」

「その通りです。閣下」

そこに響いたのは凜とした女声。

「……フィール」

廃墟と化した部屋に現れたのはフィールその人だった。

フィールは静かに跪くと、口火を切った。

「数百年前の事です。王政は、あなたの兄の代で滅びました。庶民達の手によって」

淡々と述べられた言葉に、ザールは茫然自失の表情を向ける。

「……申し訳ありません、閣下。お知らせすべきではありませんが、言えませんでした。私は」

ザールの表情が驚きから静かなものへ変わっていった事にフィールは気付かない。

「ならば」

ザールの声は強ばっていたが落ち着きを取り戻していた。

「ならば私はどうすればいいのだ？」

「幸せになればいいんだよ？」

全員が勢いよく振り向く。そこには血まみれの弥々華がいた。

「復讐なんて止めて、本当にやりたいことをやればいい。でしょ？」

弥々華はそういつてへらりと笑う。

「フン……」

ザールは静かに鼻を鳴らす。

「下等種如きに気付かされるとは、私も落ちたものだ」

フィールの顔が静かに輝く。

「行くぞ、フィール」

「はい！！ 閣下」

につこり笑うフィールに、ザールはふんと手を振る。

「調子の良い奴だ」

「これにて一件落着でありますな」

ケロロはクロの隣に立つと、楽しげに笑う。

「おお」

クロは心底面倒臭そうに返答を返すと、1人呟いた。

「こんなのもたまには悪くねえしな……」

海底都市にいた面々は入り口となっていた浮き島に避難していた。

避難してからは、かなりのドタバタ騒ぎが起きた。詳しく書き出すと剛とミーが泣きながら抱き合っている横で、弥々華がギロロに説教を食らわしているのは、クルルが民間人の記憶操作を行っているのは、タママが西澤桃華に迎えを寄越すよう頼むのは、他の面々はザールの宇宙船を取りに行っているのは……ともかくそれが同時進行で起きていた。

科学者や海底都市のスタッフには、『海底都市が謎のテロリストに占拠され壊滅したが、テロリストは死に自分達は生き残った。死体は海に流れた』といった記憶を入れたらしい。

そして、今だ。

「行くでありますな、ザール」

海底都市の墓標より引き上げられた宇宙船　　ザール達が封印と称したコールドスリープに入っていた場所　　にザールは乗り込もうとしていた。

「ああ」

ザールは気怠げに頷くと、ハッチを開ける。

「私の過去は、確かに消せない。だけど未来なら、作り出せる。私

は幸せになれるだろうか？」

「なれるよ」

弥々華はそう言って、手を握った。

「絶対なれる。だってあたし幸せだもん。だからザールも絶対なれるよ」

泣き笑いの表情に、ザールは苦笑した。

「そうか」

ザールは頷くと、宇宙船に入りハッチに手を掛けた。

「貴様達には礼も謝罪もせん。では、さらばだ」

ザールの乗っていたハッチが音を立てて閉まる。

宇宙船が飛び立ったのは次の瞬間だった。

「行っちゃったなあ」

クロが清々した、と呟くとケロロは苦笑を返す。

「そう……だね」

弥々華がその言葉を返した時だった。ぱたんという音がした。

「「え……」」

シーンと起きたのは、静寂。そのど真ん中では弥々華は蒼白な顔で倒れていた。

「も……弥々華殿ー！！」

そこで弥々華の意識と記憶は完全に途切れてしまった。

西澤桃華の迎えが来たのは、それから30秒後の事だった。

翌日。

ケロロ小隊の秘密基地にある医務室。

「隊長……」

弥々華はかすれた声で呻くと、ケロロを見た。

「おでこに傷、残っちゃったでありますな」

ケロロは残念と言わんばかりに首を振った。

「いいよ、気にしてないし」

「弥々華殿、女の子なんでありますからそんな無茶しちゃ駄目です
りますよ」

ケロロの腕が伸びる。触れたのはしつかり残ってしまった傷跡。痛々しいとケロロは呟いた。

「誰もお嫁に取らなかつたらどうするでありますか？」

「別に、結婚なんかどうでもいいよ」

弥々華の口調は素っ気ない。

「あたしは誰かを守ればそれでいい」

ケロロの目が、半ば無意識に見開かれた。

「駄目であります。弥々華殿には変わりがないのでありますから。

弥々華殿がいなくなつたらきつとみんな悲しむでありますよ。我輩も部下を失うのは嫌であります」

「うん」

ケロロの顔は上司が部下を諭すような『隊長』の顔だった。

「だから無茶しちゃ駄目でありますよ」

「隊長……」

そうだ。

こんな顔をさせちゃ駄目なんだ。人に心配を掛けては駄目なんだ。

無茶だと言わせちゃ駄目なんだ。

弥々華の手に力がこもる。

「了解」

無茶を無茶と思わせない位に強くなる。誰かをかばっても怪我をしないくらいに。そうすれば消えるのだろつ。心配もその表情も。

「隊長」

「何でありますか？」

「ありがとう」

少しばかり大人びた笑みに、ケロロは柔らかに微笑んだ。

「どう致しましてであります」

偽善者といわれても構わない。自分が守ると決めた物を決して取りこぼさず守り通す。

それは自分の周りにいる人であり、世界だ。

誰一人欠けずに未来を見たい。

明日、明後日……そして未来を見る。

それが自分の戦う理由なのだ。

弥々華はやっと見つけた道を握りしめ、目を閉じた。

「お世話になりました」

とりあえずケロロ小隊の基地で事情聴取を受けていたクロ達が帰る事になった。

「軍曹さん、会えて嬉しかったです。また会えますか？」

「もちろんでありますよ」

「アホか、俺たちは侵略者なんだぞ！！」

胸をはったケロロをギロロがぱかと殴る。

「準備出来たよ。皆さん」

そこへ口を挟んだのは、頭に包帯を巻いた弥々華だった。

「送る場所がゴミの投棄場になってたけどいいの？」

空間転移装置の前で弥々華は首を傾げる。

「ああ。問題ないから大丈夫じゃ」

剛が頷くと弥々華は小さなため息を吐き出した。

「分かった。ならもう行けるよ」

「そうか」

クロが軽く頷くと、じゃあなと軽く手を振った。

ケロロ小隊は敬礼でそれを返す。

空間転移装置が閉じた瞬間、弥々華の肩から力が抜けた。

「終わったんだね……隊長……」

「終わったでありますな、弥々華殿」

そう言って、2人は顔を見合わせた。

事件はここに、終息した。

T o b e c o n t i n u e d ?

後書き

どうも、こんにちは！！
作者の百花です。

Cross world 2nd season 〳海底都市と機械猫〵、めでたく完結致しました。

今までお読み下さいまして、本当にありがとうございます。

先日起こった巨大地震のせいでプロットの変更を余儀なくされてしまい、時間が掛かってしまいましたが無事に完結です。

書いてみて気が付いたのはサイボーグクロちゃんのセリフ回しの難しさだったりします。クロが難しいです。暴走キャラで良い奴で、かつこいいオス猫なんて、本当に難しかったです。

さて、ここで話題を変えてスペシャルサンクスです。

まずはザール&クラーケン。

この2人のキャラクターは私オリジナルのキャラではなく、meg a 12さんというユーザーさんが考えたキャラクターです。

魅力的なキャラクターを書かせていただいて本当にありがとうございます。

そして読者の皆さん。

Cross world 2nd season 〳海底都市と機械猫〵を読破頂いて本当にありがとうございます。このお話は超小説版ケロロ軍曹+black&whiteであります3 撃侵力オスドラゴンウォリアーでありますに続く物語です。なのでそちらにも、お付き合い頂ければ嬉しいなと思います。

最後になりますが先日の大地震で被害を受けた方々に、お見舞いの意を申し上げます。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1981p/>

Cross world 2nd season ~ 海底都市と機械猫 ~

2011年8月21日08時37分発行